301740000-7
別つ—2

椿姫

アレキサンドル・デュマ・フィス/ 著

M36
DBY- 38

F53
D961c

四版

長田秋濤譯

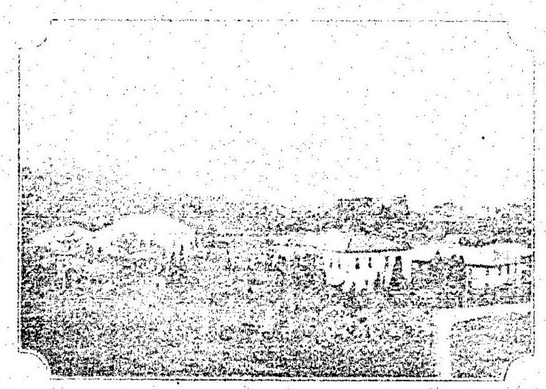
文學叢書

椿姬

早稻田大學出版部藏版

文學叢書發行之趣意

我校隙て歐米に所謂〔大學普及事業〕の擧に倣ひ或は盛に諸科の講義錄を發行し或は講演を各地方に開き以て高等國民教育の擴充を圖ること茲に年あり然るに從來は政治法律經濟外交史學等の著譯を紹介するに忙うして未だ曾て純文學の鼓吹に從事するに及ばざりしが今回漸く幾分の餘力を得たるにより乞うて新學專門の諸家を起たしめ新に活動の端を發き文壇刻下の沈睡を攪破し兼れて文學の新機運を招致せんと企圖す乃ち其の手段として一面は古きを東洋の古傑作に溫れて斬新なる評論註釋に新智闡發の道を開くと同時に一面は泰西最新の名著傑篇を飜譯若しくは評論して十九世紀末葉の大思潮を紹介し髣髴新理想の投影を傳へ以て將に來らんとする人事相の豫測に便ならしめんと期す而して本校の素志は主として世の國典を補ふにあるがゆゑに所謂東洋の古傑作の如きは既に屢々紹介せられたるもの乃至稍〻陳腐に屬せるものを避けて我が未來の文學的活動に關係最も深かるべきものをなくば世間に珍とせらるべきたぐひのものゝみを選び且つ最も斬新なる方法によりて其の紹介に着手したり但し追々に事業の步武の進むにつれて餘力の前陳以外に及ぶもあるべきは固より論を俟たず



早稲田大學

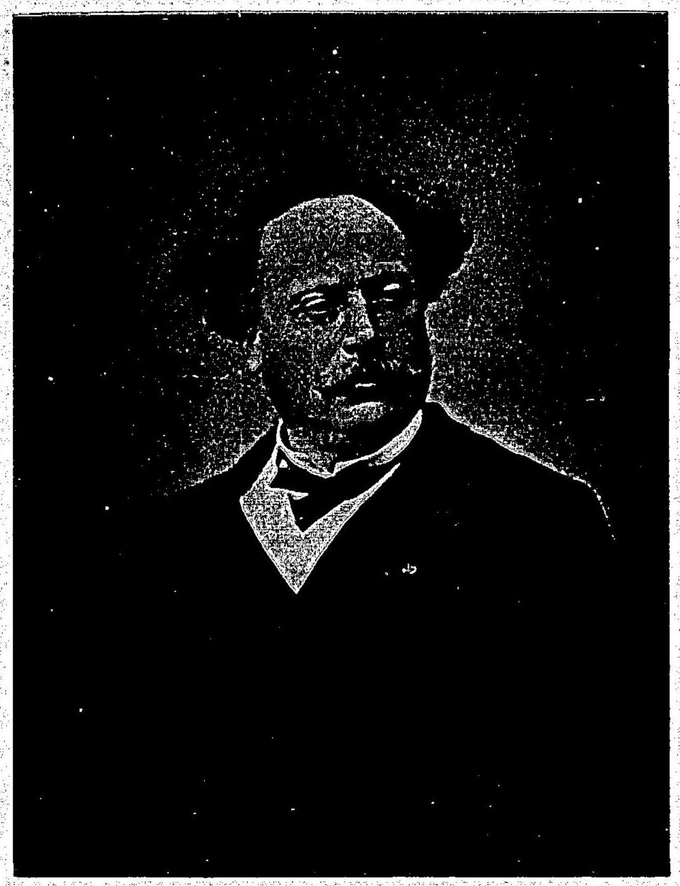
国立国会図書館
28.2.13

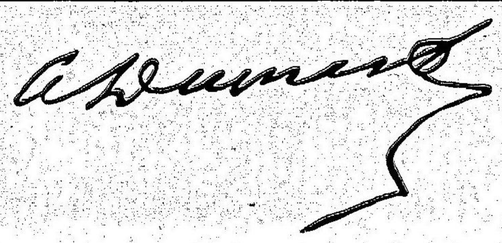
U 32173

鬼林子撰註　櫻庭篁村著
元祿名著集　宮崎三昧選
俳諧七部集略解　尾崎紅葉著
有職故實　赤堀又次郎著
謠曲評釋　早稻田文學會編述
小文學　宮崎三昧譯
說那麗曲評釋　森內楓南著
元曲學　坪內雄藏著
英詩文評釋　坪內雄藏著
英詩文評釋　增田藤之助著
名家作　島村瀧太郎譯
短篇集　高安月郊譯
イプセン作社會劇　尾崎紅葉瀨沼夏葉譯
トルストイ伯著アンナ、カレニナ　登張信一郎譯
フライタッグ著ソル、ウンド、ハアバン　上田敏譯
フロウベル著マダム、ボヴァリー　梅澤精一譯
ハーディー著テス　平葉鐵藏譯
ストップフド著英國小說進化論　中島茂一譯
ドウデン著シエークスピヤー　內田貢譯
ディッケンス著オールド、キユリオシチー、ショップ　正宗忠夫譯
ヘンリック、ハインキヤーツ著クオーバデス

此兒世に生るゝ時、思ひ設けぬ難產にて、子は一命覺束なかるべく、親もそこばくのいたつきは免かれまじなど、人々の憂ひ合ひし程なるを、このたび無事出產、親子すこやかなるを得るは、一に左の諸氏が看護とりあげ等に一方ならぬ勞を致されしによる。よりて謹で此兒を献ず。

鳩山和夫君　花井卓藏君　羽田智證君
高橋捨六君　武內作平君　卜部喜太郎君
小川平吉君　櫻井熊太郎君　鹽谷恒太郎君
關晢治君





序

デュマ、フィスの作は道義の念を寓したるもの、これあるが故に先づ尊いので、之を思はずして彼を解せんとするは謬れるの甚しきものである。

彼の素生、及其少年時代の境遇は彼をして洪大なる同情、深遠なる博愛心を養はしめ、又社會に對し劇しき不平の念を懷かしむるに至つた。彼は『愛すべき人にして世の愛する所とならざりし薄命の人』に向つて、無限無涯の同情を濺いだので。之と同時に愛すべき人を愛せざる社會

を責め、之を誡しめ正さんとしたのである。此二箇の大主義は一切彼の作品の上に現はれて居るので、之を外にして彼を讀まば、趣味の半は以上は失ひ去られて、唯文章言辭の美を見るのみとなるのである。

勿論彼の文章言辭のみの價値と雖ども實に凡庸の作品と同一視する事は出來ない。即ち彼の作は十九世紀文學史上忘るべからざるもので、此點からのみ觀ても歐洲五大文豪の一人に數へられる。氏以前の小說脚本は皆寓意のもの、勸懲の意のあまりあからさまなもの、空想を逞

うして常識に反するもの、等であつたのを、彼一たび出でゝ寫實の風を起し、眞箇文學の模範を示したので、文壇の氣風靡然として之に從ひ、文學史上の一大紀元を畫するに至つたのである。

で本篇ダーム、オウ、カメリアは彼が初めて文壇古來の因襲に反し、一新機軸を出して寫實の筆を揮ひ、茲に純文學の標本を示して、幾多の作家を導いたもので、即ち新紀元首頭の作である。凡て新風潮の先驅者として現はるゝ作は後になると文學史的價値を止むる計りで、作其物としての價値は極めて些少のものだが本篇に至

ては即ち然らず、今日寫實派全盛時代、否殆ど十分の發達を終つた後に在てすら、世は愛讀して措く能はず現に十八ヶ國以上の國語に飜譯されて其美をたゝへられつゝあるのである。

殊に又本篇は彼の同情と、社會に對する不平とを、最も明白に、最も痛切に、最も美しい相應しい形情と人物を借りて寫し出して居るもので其一篇の人物等が、奈何に彼の同情と不平を描出するに適當なる材を擇んであるか、又何故に彼の同情がしかく篤く、其不平がしかく劇しきかは、畧傳と本篇とを對照されゝば蓋し思半ば

に過ぎるであらう。

予は本篇が十九世紀中五指に屈せらるゝ傑作なるが故と、近世寫實主義の先驅なるが故と、デュマ、フィスの洪大なる同情、及一種異彩ある道義の念の面白きと、更に其作が今日も尙面白く、近時多く見るべからざるものなるとの故を以て、不文を顧みず敢て之を本邦に紹介するのである。

明治三十六年春庭の椿の咲きほこる頃

東京牛込の矯居に於て

譯者識

マリーヂユプレシス夫人(椿姫)の肖像

少アレキサンドルデュマ略傳

一、千八百二十四年六月二十八日巴里に生れた。母は裁縫を業として居たベルギー人で名をアリーカテリーヌテブレーといふ。氏は其の私生兒である。

一、デュマ母の愛育を受け數箇の私立小學に學び、業を卒へてブルボン高等專門學校に入り、茲に大に其英才を顯はした。

一、大アレキサンドルデュマが自分の子として認知を與へたのは同校在學中の事である。

一、同校卒業後大デュマに養はれ隨分愛撫された事もある。少デュマ此ころ一篇の詩集を公にしたが、更に文才の見る可きものの無く、全く失敗の作に終つた。

一、父に隨つて西班牙、北亞非利加を旅行し、歸つて千八百四十七年に一篇の小說を著し、翌四十八年に椿姫外二篇を公にして大に文壇に雄飛し、爾後五十六年の頃迄盛んに小說を

書いた。

一、千八百五十二年椿姫を脚本として出版し大に世の高評を博し爾來脚本に手を著け、漸次修業を重ねて主に脚本に筆を採る事とし、劇文壇の雄將として六十六年迄其覇權を振ふて居た。

一、餘りの多作に健康すぐれず、暫し作品も出さなんたが、七十三年脚本二篇を草して近時の傑作と稱せられ、爾來引續き巴里の視聽を一身に集めて居た。

一、七十四年一月、選まれて佛國翰林院學士となり、爾後雄勁なる論文を草して世に論題を與へた事屢である。

一、七十年の戰爭には田舍の別莊に退いて居た、父デュマの死する時は看護親切を極めて至らざるなしであつたさうな。

一、八十七年頃迄筆を執つたが、竟に九十五年十一月廿七日、遂馬不歸の客となつて了つた。

椿姫

アレキサンドル、デュマ、フィス作

秋濤居士譯

（一）

熟く手に入つてからでないと迂濶に言語も喋れない、同じ理屈で永年研究を積でからでなければ、我手で人物を作り出し小説などを書く事は能きない、と自分は考へるので、未だ創作する迄に經驗の積める齡でもなしするから、唯事實を其儘に述べる丈で滿足して置かうと思ふ。

事實其儘總て有つた譯で、篇中の人物、女主人公の外は、悉皆尚生存て居るし、事實の大部分に就ては現に一々證人が居る。

だから若し自分の譚丈では眞實らしくないとわらば、一々喚び出して證人に立たせる事も能るのである。但し特別の事情で、自分のみひとりよく此譚を書く事が能る。といふのは最後の消息を詳にする事が能たからで、若し是がなければ、興味索然、譚も半分丈に終ったに違ひない。

さらば之を聞出した徑行はといふに、

恰も三月十二日ラフイット街を通ると、黄色の貼紙が自分の目に着いた。

競賣廣告

一家具珍器

右所有主死亡に付來る三月十六日正午十二時より午後五時迄の間に安丹街九番戸に於て競賣致候、御望之方は十三十四兩日中同家に就き品物御一覽被下度候

全體骨董物は大嗜好だから、設令買へない迄も、見る丈は是非見たいものと、翌日早々出掛けて試た。

朝まだ疾きに男女の觀覽人既に群を成し、婦人連は孰れも馬車を待たせ、天鵝絨の服にカシユミールの肩掛といふ奢つた裝でありるが、而も室内の贅澤さ加減には有繋に愕げて唯打目成つてゐる計り。

果哉、驚くも道理、これは園物の住居である。凡そ交際社會の婦人連が見たがるものは何と問はゝ、必ず斯樣いふ女の家庭に相違ない。畢は縱横に馬車を驅て無遠慮にも自分達の馬車へ泥や塵を飛ばした失禮な賣女、夜は劇場に自分達と枠を並べて上等の機敏に華奢を街つた憎い女郎、花の容顏と飾の珠と、我儘放埒で巴里市中を暴らし廻つた怪しからん女の内幕、正に是れに違ひない。

所が幸ひ今此賣女が死んで了ッてゐる。斯樣なればもう大丈夫、何如に閑雅淑德の令夫人が、此賣女の寢室へお這入りにならうと、聊か異議なし。何しろ佛になつてゐる、即はち、「死」の神が全然此家の空氣を淨めて了つてゐるから、聊か咎める所はない。併し此で尙可ないといは、「私等は唯買物に參りましたので、何誰のお住宅でしたか毫とも知らないのでございます」位に白ッぱれくりや夫れ迄廣告を見る、甚麼物だか見たいと思ふ、豫見をして選ッて置く、これは當然で、不思議はないのだ。が併し、其實はといふと、婦人達は此圍物に就ては珍奇妙來不思議千萬の譚を幾何となく聞いて居るので、是非此結構な物の裏に此女の內幕の一端なりと引捕へではと鵜の眼鷹の眼に一生懸命、索めては見たが、生憎、秘密一切本尊入寂と共に消えて了ッて居るので、そのむかし女菩薩存生中に在ッたい

みじき賣物は一も無い。が其他の物は其儘に揃つて居て、孰れも貴い、奇らしい物づくめである。例へば戸棚、卓子など、或は薔薇木、或は象牙細工、皆當代名工の作、花瓶皿鉢も、セーブル燒又は支那出來で、其外獨逸サクソン製の小さな彫像、或は繡子、天鵝絨、レースなど、孰れ一寸何千圓の代物ばかり。

夫から夫へと巨細に調べて行く婦人達の跡に蹤て室々を廻ろ中、一隊はペルシャ織に貼り詰めた一室へ這入つたので續いて這入らうとすると、行き違ひにどやどやと、面に異樣の微笑を浮べつゝ出て來たので、自分は大きに好奇心を動かされ、突と這入ると、是は、化粧室、萬般の化粧品が置いて在つて一目に此女の贅澤な活計向の最も甚い點が見られる。まづ壁によせて卓があつて、一面にオーコックだの、オヂオの貴重な物が輝いてゐる。其上には無數の小道具が載つてゐるが、孰れも

此種の女の化粧に飽くべからざる物ばかりで、凡て金銀造りなのには、有繋に驚くの外はない。思へば是れ丈の物、到底一時に買へるものではあるまい。幾人の情夫が之れを買ひ、之れを讓り、讓り受けては買ひ足して今日に至つたのであらう。

園物の化粧室とは知りつゝも、之を見て左して愕きもせず、仔細に眺めて居ると、一つ面白い事を見出した。といふのは一々物品に附いて居る頭文字とか紋とかゝ夫々異つて居る。結局一々異つた恥辱を現はしてゐるのである。

思ふに普通の人間が一度死ぬものなら、斯麼女は罪業の報で二度死ぬ譯である。青春の齢傾いて色香衰へるのが榮華の夢の見終で、先づ浮世では死ぬ譯になる。今此家の主人は此憂目を免れて、榮華の最中に彼の世へ旅立ちをした。神樣がお救ひ下すつたのである。凡そ哀れは多いが不德の人の老衰した

程の哀れはあるまい。況や婦人に於てをやで、人からは見下げられ、世に在て役には立たず、其むかし金錢を湯水のやうに費つた事や、萬事心得方の誤つてゐた事を、悔み、恨み、悶え、苦んで、果が垢ほどの安心をも得ず、白骨となるのである。

這麼事を考へてゐる中、端なく憶ひ起した事がある。自分の知合に、昔し依然斯樣いふ世すぎをした婆樣が在つて、美しい娘を有て居たが、決して私兒といふ情愛はなく、『善く稼で母樣に樂をさせてくれないぢや』と命令る時ばかり母親風を吹かせる。娘は却々親孝行で、情も捨て、樂も捨てゝ母に從ひ、世間の子供が萬卷の手傳でもする調子で、例の忌しい稼業を行つてゐた。

抑も生れ落ちるとから善惡邪正の念がなかつたのではあるまいが、常に病身であつたのと、一つには不斷不德な事を目に

耳に慣れて居るので、竟に善惡の念が沒くなつて了ッたのであらう。で「此娘賣物」の札をこそ附けね、毎日々々同じ時刻に母が親切に娘を伴れて大通を通る。此頃は自分も若かッたので此娘と好い情交になるのも萬更ではないと思つた事もあるが、附いて居る老婆の顏の可厭な事、面と對つて唾を吐き掛けても足りん程であつたから、幸に過もなく濟んだのである。

娘の顏には處女の穢れぬ所が明白と見え、實に無垢な、純潔な質で、獨りひそかに苦惱に堪へて居る風である。所が一日、娘の顏容が見違へる樣に更まつた。老婆が暇なき苛責の中に、神が一個の慰藉を與へたのである。——浮世の重荷に堪ふべき力を與へなんだ代りに、茲に一の慰藉を惠むは、神として素より然るべき事であらう。——其は何？といふと、腹に誰かの胤を宿したのである。苦痛の中にも人の心は妙な點に悅を見出す

ものである。娘は躍り上つて悅び、息急き切つて母に報せに往つた。

筆にするだも背に汗を覺える樣な話だが、實際の事だからいふので別段に好んで書く譯ではない。殊に世の人が是等の譚を理も非もなく罵り飛ばし、甚だしきは、耳をも貸さずに頭から斥けるけれども、這箇の裏に誠の涙を濺ぐべき裏れが伏在してゐると思ふと、言ひとしても竟に止む事が出來ない。で更に言ふが娘は子を孕んだ。すると母親は忽ち尖り聲で、『お前まあ考へて見る。が可いやね、今でさへ妾等二人の口が凌ぎ兼ねるんぢやないか。夫れが三人になつて御覽、如何してお前やり切れたものぢやあない。加之に小兒なんぞは要らないもんだし、お產で寢て居られる間奈何程の損だか知れやしない。』と以ての外の不機嫌。

堅る日母親の知合で產婆をして居る婦人が來て、娘の狀態を

診たが爾後三四日床に就て、起きるは起きたが、顔色更に蒼く、扶ッた樣に頬がこけて了ッた。後三月計、さる男が之を悶み、堀體から精神まで癒して與うと骨を折ッたが、前の老婆の療治が痛酷過ぎたので、到頭亡き人と爲つて了つた。其くせ老婆は未だに生恥を晒して居る。

眼の前なる銀製の化粧品を見るともなく斯麼事を考へて居る中に、隨分時も經つたものと見え、人皆散じて唯吾れのみとなつてゐる戸の側に番人が佇て物でも胡魔化しはしないかと目を側てゝ居るのでツカツカと其方へ近附いて、

『巻』と此家に住つて居た方は何誰ですな。』

『後藤露子です。』

夫なら名も聞いて居るし、顔も見て知つて居る。

『オヤ、後藤露子が沒つた？』

『ハイ、沒りましたよ。』

『何時です。』

『三週間計前でせう。』

『何故此家を見せるのですな。』

『斯樣して直賣を爲やうといふ債權者の計畫あんです。客人の方で前以て品物がお解になりさすれば自然買進むやうな理屈で』

『借金が在たのですか。』

『エ、〳〵山ほど。』

『夫で賣上高で償却が付く見込ですか。』

『餘つて返りますよ。』

『餘ると誰が取るのです。』

『遺族です。』

『ハ、ァ親戚があつたですか。』

『然らしうございますね。』

『イヤお邪魔をしました。』

番人も自分の心持が解たので、ちよいと帽子に手を掛けて會釋をした。自分は路を辿りながら

『可哀想に、彼女は餘程惚れな死樣を爲たに違ひない、那の社會では軀體が壯健な間だけしか人が交合つて呉れないんだからな。』

と、我にもあらず露子の運命を悲んだのである。這麼事をいふと人は異しく思ふかも知れないが、自分は此種の婦人に對して深く同情を有て居るので、之に就いて別段社會に分疏する必要はないと信じて居る。實は嘗て田舍へ散策に出掛けた時、近邊の街で若い女が拘引されるに當り、誕生前の嬰兒に別

れねばならないので、はら〳〵と涙を流しながら之に接吻するのを見た事がある。此時からといふもの、婦人を見て直ぐに之を侮る樣な事は忘れても爲ない樣になつた。

（三）

競賣は來る十六日、豫見の日と一日の間が置いてあるのは密掛抔を取外す爲めなのであらう。

此頃自分は丁度旅行から歸つて來た處で、不在中の珍話は一日友人が來て報せて呉れたが、露子の死だ事は些も聞かなかつた。夫も其道理、露子は美人には違ひないが、生きて居てこそ世間の花、死んで了へば火の消えたと同然なんだ。火といへば斯樣女はいはゞ太陽で、冲天に在る間は誰も忘れないが、昇るのと沒るのは誰も知らない。

尤も齡若くて死ぬと情夫が何人あらうと情夫同志は大抵

皆親しい間柄だから悉皆一度に知れ渡つて了ふ。で御互に憶出してちよい〳〵と話し合ふかと思ふと既う終末で、涙一滴零しもせず、其麼事があつたか知らといふ顏も見えない。勿論左樣でなければ今の時節は到底可けない。人も惡く賢うなつて、二十五位の年齢を占めると、さう安々涙も零しは爲ないまあ親が泣て貰ふ代に兒供を育てると子は代金先拂に受取てあるので漸と泣く位が頂上なんだから。

併し自分は聊か露子に關係はないにも拘はらず、前に言た例の同情で、どふも其死んだのを悲しまずには居られなかつた。或は夫丈に思ふ位打はないのかも知れん。が夫と知りつゝ非常に氣に懸るので、毎日の樣に露子がボアの公園を通るのを見たのまであり〳〵憶ひ出される。屹度二頭立の小さな藍色の馬車なんだ。夫で幾何他の婦と雜つて居ても、水際立て目に著く、全く類罕に美くしい女であつた。

斯類の女が戸外へ出る時には必然同伴がある。一緒に行く男が逢向ぢやあまり目立つからとか、乃至女が、話對手なしでは淋しいとかで、一寸召使の格合に扱へる婦人とか、乳母役を勤める老婦などが伴ふ事になる。所が露子のは然でなく極樂街に馬車を驅るのは平常孤獨。思ひ切り背後へ倚ッ掛つて冬は大抵毛皮の衣、夏は身輕な瀟洒した衣を著て居る。で途中知合にでも出逢ふと、微かに笑を洩すが、此笑ひ方が却々一通りでない。抑も會釋を爲やうと思た時でなければ爲ないよし爲るにしても、先づ公爵夫人の行方で、ほんの會釋された人に丈しか解らないといつた樣な鹽梅。此調子で極樂街を一直線にズッと駈け拔るので、他の婦の樣に彼方此方と徘徊するなどは曾て無く、ボアの公園へ著くと、颯然と降りて一時間計歩

行く、夫を済ませると馬車で、眞直に家へと歸て了ふ。

斯樣種々な事が現然と心に浮んで來て、苑がら結構な美術作品が壞れて了ッたのでいもあるかの如く、深く彼の死去を悲んだのである。

熟く言ふ奴だが、美人は愛嬌に乏しい。嬋妍の美と、濡るやうな愛嬌、双つながら備へたもの、天下廣しと雖も未だ曾て聞かない。處が之を備へてゐるのは唯此露子ひとりである。身丈の纖婷と高い丈がはや言ひ難く艶であるのに、著物の著こなしの巧な事、到底他の婦人の及ぶ所でない。まづ肩掛の絹が裾の邊まで垂れて、其下から衣の裾がホラ〳〵とひらめく容子、脱衣を當てゝ居る胸の邊りに著物の觸の寄ッて居る塩梅、奈何に邪慳な姑が見ても、美しいとしか思はれない。夫から其頭、此こそは實に魔物だ。露子も此化粧には一生懸命頭の形が小さくて

圓く、髪は艶かな漆の糸、よくまあ母親が此迄に生み著けたものと驚かれる計。

切れの長いパッチリと張の好い黒曜勝の眼の、上から、描いたやうな遠山眉が隈取つて居る處、穂長の睫毛が伏目になる度に、磨ぎ出した樣な湖紅の頰へほんのり影を落す處、直線といふでなく、曲つて居るといふでなく、すなはに通つた鼻筋、尋常な口元、さては花の唇微かに開いて、珠かと計り眞白の齒が行儀よく揃つてゐるのや、宛然樹に生つて居る桃の實の湖紅い所に、天鵞絨の如き滑かな毛が光ッてゐるやうな顔の色、唯もう美といふの他はない。艶といふの他はない。加之に例の綠の黒髪、自然が手入れしてかは知らず、しなやかに波を打て居るのが、前額の眞向から二つに別れて、双の肩へ垂れかゝつてゐる鹽梅、其面色との微妙な配合、到底言はれたものぢやない。

生際から頸へかゝる漆の一流れ。纔かに殘した耳の端に、燦然光を放つのは金剛石で、一粒廉くも二三千圓は確實

實は露子の肖像で和田畵伯の筆に成つた畵がある。是丈の美人、斯人の靈腕でなければ到底描く事は能ないので、流石に肖るも肖るも活寫である。自分は幸にも露子死去後數日に此肖像を手に入れることが出來たので、細々した顏の造りなど忘れて居たのだが、お蔭で憶ひ出したのである。

演劇の初日とわれば露子は必ず往くので、夜は劇場とか夜會とで更かすのが常規。劇場へは携へて往く物が又定ッて居て、第一が兩眼鏡、菓子一包と椿一束。所が月の廿五日は白爾餘の五日が紅と、椿の色が違へてある。露子に交際ふ者はじめ始終劇場へ往くものは皆之に眼が着いて居るが、之を書く自分は勿論、誰一人其所以を知つた者なしとの事。併し紅白の差は

あれ、用ふのは常も椿で、これ以外の花を有て居た事は曾てない。乃で花屋では、露子を御して『椿姫』と附けると、之が其まゝ世間の通り名になつて了つた。

其道の女は孰れも斯樣だが椿姫も常に交際社會の遊冶郎と僧に暮して、自分も之を公言し、男の方でも之を外見に爲て居たところが、暫時田舍へ往つて居てから爾來凡そ三年、始終這入り込んで居るのは金滿家と評判のある外國の老公爵で此人大に露子を導いて、以前の樣な活計方氣の持ち樣を改めさせ樣と努めてゐるさうな。

老公爵との關係に就て自分の聞込んだのは、大略次の通。今から言へば五年前の春、椿姫酷く病氣で衰弱したものだから、醫師の指揮で湯治場へ往た。すると同じく溫泉へ來て居る病人の中に、此公爵の令孃も在つたが、相憐むべき同病に苦し

んで居るのみか、其面容の肖て居る事、誰が目にも姉妹と外見えない。令嬢の方では既う今日翌日が難かしいといふ重患でわつたので、露子が來ると三四日して可惜蕾は散つて了つた。此時の公爵の悲みは奈何ばかり？　切て己が生命の一半を埋めた土地は離れまいと、要もないながら滯在して居る中、途上偶見たは娘と爪二つの椿娘、我が娘の俤であるやうに、訝と思たが一道の電流、身は露子の傍に驅け寄つて、矢庭に其手を把るより疾く、名前すら尋ねもせず、單刀直入、亡き人と生寫しにお生れなされたが不詳、可厭な老父を有たと歎めて、娘の意に可愛がらせて貰ひたい、と頼み込むと、椿姫の方では下女一人附いて來て居る限りなり、別に面倒の起る心配も無いのだから、氣輕く公爵の頼みを承諾した。

ところが偶ま椿姫の素性を知つてゐる者が、温泉場に來て

居て、遂一之を公爵に告げた。是は實に非常な打擊。顔が娘に肖て居るなどは全然空になつたのである。が、時既に遲矣で、既う露子が無くては生甲斐がない、否な生殘るべき理由がないといふ迄の勢で、別に椿姫に叱言も言はず、否言ふ權利もなかつたのだが、併しどうか從來の樣な事は止める譯には往くまいかと拜むやうにして頼んだ。勿論其代りには望通り甚麼にでもさせるからといふので。

露子は存外に承諾した。實は當時病氣も餘程重體で、感覺の鋭い身には、此病氣も過去の不行跡の爲めらしく思はれたからでもあらう。日夜神に懺悔をし、改悛を誓つて、お蔭には身の健康と容顔の美とを恢復させて戴きたいと祈つてゐる。其所爲も手傳つたのか、殊に温泉の効驗やら、睡眠の足たのや、運動や、種々な事で稍や快癒の色が現はれて來たのは夏も既末つ

方。

露子は茲に公爵に伴れられて巴里に歸つたが爾來相變らず公爵の世話になつて居る。舊より公爵が非常の金滿家といふのは世間に知れ亘つて居たが、此頃非常の豪奢を極められるので、露子との關係の所以も解らぬながら、世間では專ら評判。結局は頭禿げての浮氣といふに歸着し、憶測だの、造りごと、悉く信を措かれたのである。併し事の眞相を割つて見ると、公爵の愛は全く親の子に對する愛で心と心に愛して居る計、一厘一毫此境を超へる事になれば大罪だと思つてゐるので、露子に對していふ言葉は生みの娘に向て言つても、聊か支障のない位純潔なものであつた。

但し斯樣言ふからつて自分は椿姫を好い兒にしやうなどとは兎の毛の尖ほども思つては居ない。證據には一つ彼を公平に說いてお目に懸る。露子も田舍に在た間は公爵へ約束した辭を守るのに左のみの難はなかつたので現に行つては居たものゝ、一たび巴里へ歸つて見ると、舞踏會や演劇や、酒と色との我まゝな生活に慣れた身には、時々公爵が訪れて來る位では、到底寂しくて、怠屈で、つまらない所在のない、全く死ぬ樣な心持がするので、到頭舊の通り華美な、陽氣な心になつて來た。尤も之には蓋し大いに所以ありで、彼は病氣前とは一層美しくなつて居る。芳紀は二十歳の花盛り、之に加へて一時眞の眼つて居る病氣が腹の中から煽て上げて、斷へず華美な我儘な事を爲せやうとするのだもの。

公爵の友人等は公爵と露子とに異な關係のあるものと心得て、何か婦に落度もがなと見張つて居つた矢先得たりといふので早速の注進、申上げます公爵露子の許へお出のない折

には、他し男を引入れて、翌る日まで泊る事頻々でございます。如何樣是は容易ならん事件と、早速當人に訊して試るに、露子は包まうとする色もなく、一々其通りと言つたばつかりで終尾に斯ういつた、『行ッては試ましたが到底私には能あいんですし、私も他に虚僞を吐て金錢を戴くのは嫌ですから、貴公もう私の事は關はないで頂戴。』

公爵は無言の儘突と出た限顔を見せなかつたといッても夫は一週間實は此が精一杯で、八日目には歸ッて來て、自分に逢つて呉れさへすれば、往昔の椿姫で交際ふから、訪ねて來れば逢つて貰ひたい代りには假令死ぬ程嫌な氣に適らん事があらうと、決して叱言も言ふまいとの誓言。

是が露子が巴里へ歸つてから凡そ三ヶ月經ッた時分の狀態、即ち一昨年は十一月乃至十二月の頃。

三

十六日午後一時安丹街へ出掛けて往くと、大聲に競賣するのが戸外へ迄聞えるのである。家の内は人一杯、中には極く華奢な、意氣なそれしやが澤山居る。高貴の婦人にしては再と逼慶女に逢へる機會はるまじく、而も竊かに其身上を羨ましく思ッてゐるのだから、機逸すべからずと、是等を見やうで大騒動。

千紫萬紅花色々の中に一入目立つ桃櫻三五人を擧げると、F公爵が肱で突いて居るのは當時大にしよげ返つて居る賣女A嬢で、T侯爵が一個家財を買ひに掛つた處を、女の意地から向を張つて、思ひ切り買ひ上げた小氣味よさ、有繋侯をして躊躇せしめて居るは當時最も華奢で、さる男と浮名を流したD夫人。マドリッドで聞けば巴里で金を費つて身代を磨り減らして終ひさうだとの評判なり、巴里で聞けばマドリッドで然だとの評

判で其質を洗つて見ると、月々收入丈の金も費つた事のない

といふY公爵が、頻りに談話をしてゐるのは當時交際社會で

頓智の好い、對話に際のあい、交際上手と知られたM夫人で、此

は口八丁手八丁、舌の先の機轉も好いが、喋る事を小新聞へ投

書して見たり、或は書いた作へ堂々と名を署して見たりする。

かと思ふと同公爵が一方に左も心ありげに眼配の禮を交せ

たのは、極樂街の花と謳はれてゐるN夫人で、此婦は平常大抵

薔薇色か藍色の着物を着て、大きな二頭の黑馬に馬車を牽か

せて居る。此馬二頭代五千圓、トーニーから買つたのだが代價

は例の身を賣て之を拂つたさうな。最後に斯道の驍將R嬢、此

は腕一本で世間の婦人が持參金で極め込む贅澤の二倍をす

るし、色で男を惱ます段になると三層倍にやり切るといふし、

れ物、これも寒さを厭はず何か買はうと出て來て居るので同

じく衆目を牽いて居る。

此他一室の中肩摩轂擊する折、ハッと思ふ樣な人々の名前を

書き立てれば、濱の眞砂の數は盡ねど、讀む人も愈屈、此位にし

てさて一言加へて置きたい事がある。他でもない、人々就れも

大陽氣上々機嫌であつた事、大抵は椿姫の知合であつた事、而

も夫をおくびにも出さなかつた事、即ち是。

七々日の忌が明けやうと明けまいと此方の知つた事ぢやな

しと云はぬ計り、悉皆陽氣に嘻々と笑つて居る。到底普通の聲

では濟らないので競賣人は金切聲ふり絞つて叫んで居るし、

前の方の腰掛に幷んで居る賣手は躍起となつて、今少し靜肅

にさせ樣としたが、いや、はや駄目の事、太古以來、未だ曾て無い

程の喧ましさ、曾て無い雜多の人の集合、自分は密と辷り込ん

だ。が人々がかく笑ひつゝ賣買してゐる遊愛の品の主人は、恰

度此隣室で死んだのだと思ふと、唯もう目も掻暮れる計である。元來自分は見物が主で、買ふ方はどうでも可いのだから意を注けて競賣人の顔を見て居ると、目算より上の値打に賣れる度に喜色滿面になるので、夫が却々面白い、考へて見りや商賣人といふ方々は揃ひも揃つてよくまあ那樣正直で居ッしやるもの。先づ此婦人の商賣を的に若干の金を貸付ける、夫れで貸した丈は存生中に取つて了ふ。斯樣して置きながらさあ死ぬといふ間際になると、やれ支拂命令の、それ差押のと存分苦め拔いて、成佛して了ふと公然にやつて來て非義非道な貸金の利息を取るのみか、下劣千萬な胸算用で的にしてゐた儲けをせしめて往く。古人が商賣と盜賊とは守本尊を同一にしてゐるが、誠に道理な次第である。

衣類、肩掛、寶玉抔暫く間に賣れて了ッた。で自分の欲しい物は何にも無ひ。が依然歸りもせずに居ると、忽ち開く一聲の叫び聲。

『サア〳〵書物一冊、上製美本の金縁で、題號は「マノン、レスコー」初めの頁の書き入れが價値。サア幾何、十兩』

第三章

『十二圓』

『十五圓』と自分は叫んだ。何といふ意だッたらう自分にも解らない。按ずるに其書き入れに心が動いたのに相違ない。

『サ、十五兩』と競賣人は繰返す。

『三十圓』

叫んだのは胃頭に聲を出した男で、奈何やら更に劇戰を挑む調子、斯樣なれば既う意地づく、自分も寸分退かぬ調子で、

『三十五圓！』

『四十圓』

『五十圓』

『六十圓』

うぬ、夫に驚く自分ぢやないどうだ

『百圓！』

儻し自分が唯乘を驚かしてやらうとの考へであつたらば實に非常な成功である。良多時は森と靜まり返つて、乘皆我が顏を打眺め、斯程堅く決心して此一書を求めんとする人は抑甚麼男といひたげの面色。

最後に出した聲の調子が如何にも決然として居たので到頭敵も斷念したらしく、幾何爭つて試ても究竟は書物の値を十倍にも糶上る計りで、依樣自分が競落すに決つて居るのだからと到頭爭ひを止め、慇懃に腰を屈めて

『私はもうお讓り申しませう。』

と叮嚀に挨拶した。少時待つたが其上の呼び聲が無いので書物は竟に自分の手に歸して了つた。

財布の口は閉て置ても、自惚といふ强いやつがあるから、動機に因ては又甚麼意地を張り出さないにも限らない。是許須く身を退くべしだと、早速自分の名を署し、書物を片傍へ置かせて、早々出て了つた。

何處へ往つたつて十圓出せば買るんだ。高くつて十五圓が限度、珍らしい書籍でも何でもない。夫に大枚百圓の金を拋り出すとは何といふ意だらう、と今日の自分の狀況を見た人達は吃度種々考へて居るに違ひない。思へば面白い謎を掛けてやつたものだ。

一時間計經つてから書籍を取りに遣つて見ると胃頭の百

にはインキで見事に贈つた人の書いたものがある。

露子姉上へまゐらす

及ばぬしるしにとてマノンを

として筆者の署名が有馬壽太郎とある。

抑や及ばぬとは何の意なんだらう。有馬氏の眼に映ずる露子がマノンに優つて居るといふのは、背德悖行に於てか、抑も又愛情の濃厚な事か。第一の解釋とすればあまり露骨すぎて酷である。假令露子は自分で考へて何と思つてゐやうとも、到底其麼事を言はれて默つては居なからう。から、奈何しても第二の方が當つてゐるらしい。

其から一寸戸外へ出たが、夜になつて、もう寢やうとなる迄書籍の事は忘て居た。全體マノンレスコーといふのは却々面白い譯で、自分は殆ど暗で一々知つて居るが、書物に觸れると

今更の樣に新しく同情の念が湧き來るので更めて書籍を繙いて、又此篇の主人公アベ、ブシヴォ及女主人公と共に生活して見た。所が本篇の女主人公は宛然寫實で、巧に書いてあるものだから、讀んで居ると、極親しく自分と知り合つた人の樣な心持がする。で此女主人公と椿姫とを比較して見ると、會與更に一段で平素になく面白く讀まれる心がした。其上例の同情が憐憫になつて來て、果は自分が此本を得た女に對して幾分の愛を起さゐるを得なくなつて來た。

マノンは滿目荒涼、一望漠々たる荒野の中で一命を終へたのだけれども、滿腔の熱血を傾けて彼を愛して居る男の腕に胞かれて成佛したのぢやないか。マノン死んで世間に彼を顧みる者は無かつたが、彼が唯一人の戀人は躬らマノンの爲めに墓を堀り、手づから屍體を埋め、愛の涙に水濺ぎ、更に己れの

心を此墓の中に埋めてくれたではないか。然るに露子はもと罪の子である事もマノンと同じ事、後に懺悔改悛したのも亦マノンと同樣である。夫だのに露子の死んだのは人の心の荒野である。愛もなく情もなく、人の顧みるなき荒野。慘の又慘。淒の又淒。マノンの床の寂寥荒漠を以てしても、露子の床の冷絶酷絶なるには及ばざる遠しである。露子の臨終の頃の事を知つて居る友人から聞くと、實際露子は其終りの頃、無慮二ヶ月の月日、淋しく哀れに、濕つた寢床の傍、誰あつて誠の涙零してくれる人もなく、孤影悄然魂魄永く九天にさまよひ去つたといふではないか。

マノンと椿姫を思ふ心は、移つて他に及び、之に似た道を辿つて死だ人々の上を思ひ初めた。

彼等憐なものではない歟。彼等を愛するは或は正しくはないかも知れん。併し之を憫ひのは決して惡くはあるまい。人は醫者を見て日光を見ぬを憫れといふ。人は盲者を見て自然の偖音を聞かぬを憐れといふ。人は又啞者を見て、其心を語る事の能ないのを憐れといふが世人似而非道德に拘束せられ、恥づべき事でないのを無理に恥として、心の盲、精靈の聾、良心の啞を憐むを知らないのである。まと憐ひべきは精神の不具者で、彼等は之が爲めに我を失ひ、善惡邪正辨へる事が能ず、神の言を聞く事も能ず、愛と信仰の純潔な言語を語る事も能なくなつて居るのではないか。

ユーゴーはマリオン、デロルムを著はした。ミユッセはペルヨレットを、アレキサンドル、デユマはフエルナンドを、其他古來の詩人思想家皆圍物に同情を寄せた作を遺してゐる。時には大人名流が彼等を愛し、進んでは之を妻として世間に齒す

るを得させた例も尠くはない。自分が茲にとりたてゝ之を言ふのは、讀者の中には此の作の主題が主題だから早計にも不穏亂行を辯護して居る樣に思ふて、直ちに卷を拋り出す人が無いとも限らぬとの虞れと、之を書いた自分の齡が壯いから更に其疑を增しはしまいかと思ふからであるが、其麼事は斷じてない。もし他に仔細あらば率知らず、夫丈の事で卷を拋たうとならば、讀者安じて讀過して可也である。

元來自分は一の主義を深く信じて居る。正義の何たるを敎へられなんだ婦人に對して、神は大抵正義に到るの道二つを授けられる。其一は悲哀、今一は懇である。是道孰れも難いのばかりで、行く者の手は引掻かれ足は血塗になる。が不義不德の著物は道邊の荊棘に奪はれ、到り著く頃は、神の眼に映ッて寸毫恥つべき點のない生れた儘の赤裸々である。

吾等が人生の行路迫る道すがら、かゝる勇ましい旅人に逢へば、必ず之を助け、正しい道を示すのが人たるものゝ務である。人生の發途點に二本の立石を置て、一方に『正路』他方に『邪路』と誌し、其處へ來るものに『撰め』といふが人の道ではあるまい。我等の救主が其昔爲た如く、うッかり踏み迷ッた人に對つて、邪路より正路に移る道を示し、殊に其道の餘り困難でない樣に說き聞かせるのが人の眞箇の義務である。

神は其御子を斯土に降して宥恕と仁慈の模範を示めし、吾等に宥免寬恕を訓へられた。洪なるは基督の愛で、彼は淺ましい人間が煩惱の爲に傷けるを愛し、此傷其物の中から之を癒すべき藥を見出すを悅びとせられたのである。だから彼がマリアマグダランに曰つた言葉に、『爾罪多しと雖悉く宥さるべし、何となれば爾多く愛したればなり』とある。神聖なる宥免

！噫之あつて初めて神聖なる信仰があるのだ。

吾等が基督よりも酷でなければならぬといふ理由は何處にある？社會の人が嚴正といふ名を得んとて、努めて嚴格を粧ふのを模て吾等も亦『必ず守らざるべからず』との理屈は果して何處にある？病人の膿血の流れ去る如く、過去の罪障は滾々として創痍より流れ出で、唯一片友情の手に觸れられたら、忽ち癒へて精神の清きに復らんとする人を、眼のあたり見ながら顧みもせず、爪彈せざならぬとの理屈は、抑も何處の世界にあらう。

自分は今日の賢明なる士女に向つて訴へるのである。幸にして、ヴォルテールの說は最早昔譚となつた時代の人達に向つて訴へる。自分と同じく、過去十五年の間に人道主義が長足の進歩を爲たのを認ひる人々に對つて訴へるのである。今日、正

邪の觀念は確乎と打建られ、信念は改めて定まり、敬虔の心再び起り、社會の狀態は、尙理想通りとは行かぬにしても尠くとも已前よりは良くなつてゐる。聰明な人々の努める處、剛毅な人々の執る所、孰れも同なじ目的に向けられて、善きれ、壯なれ、眞あれといふに一致して來た。思ふに惡とは畢竟虛だ。願はくば虛を捨てゝ善の誇を有ちたいものだ。願はくは永久の希望を持たう。願はくば母に非ず、姉妹に非ず、娘にわらず、妻にもあらぬ婦人だからとて蔑如げぬ樣にしたいものである。

『天は懺悔を要せざる九十九人よりは、一人の罪人の懺悔するを悅ぶ』ものであるから、願くば吾等努めて此天上の悅びを作りたいものである。天必ず吾等に酬ゐて下さる。苟も我等斯土に生ある中、婆婆の煩惱に驅られて、道踏迷ひ、願へば隨分天の宥を受ける事の能る人達の爲に、保護と助力を出來る限り

爲て試たいといふが自分の希望である。老婆が壯い者に藥を飲ませる時の口上ぢやないが、甚く利かないにしても毒にはならないだらう。

こゝに書く樣な賤しい事柄の中から如何大仰な理屈を捻り出すのは餘りとしても大膽過ぎるように、人は思はれるだらう。が自分は信じて居る。大きな事は必ず小さな中に在るものなんだ、小さな子供、其中に人がある。小さな腦髓、其中に思想がある。一點の眼、其の中によく萬象を宿すではないか。

四

二日計りで競賣が濟で賣上總計金六萬圓、內三分の二を債權者に分配して、殘餘は妹一人と姪の子一人へ讓る事となつた。其筋の人から思ひも初めず、大枚二萬圓の遺產を讓られたとの報知を得た時の妹の驚きは實に似るものもなく凄ま

しいもの。何しろ姉と別れてから茲に六七年、曾て逢た事もなく、往昔露子の姿が飄然消え失せて以來、何如なつて了つたのやら、そよとの風の便もなかつたのだから。

妹は巴里へ驅け付けた。臍の緒切つて以來生れ在所を一歩外へ踏出した事のないといふ、大兵肥滿の美しい田舍娘。此が巴里の花と唄はれた露子の相續人である。露子を知つた者誰れとて之を見て啞然たらぬはなかつた。

棚から牡丹餅の思ひ掛もなく、この財產の如何して出來たかをも知らず、ひよつこり一度に財產を作へたので、人の話によると姉の死を悲んで涙土產に急いで村へ歸ッたさうだが、相續した遺產を四分五厘の利子で預け入れたから、奈何やら悲哀と喜悅の差引は大抵ついたとの事。

墮落の本場、破廉耻の都、こゝ巴里では圍者の死去など珍し

からぬ事なので、露子の噂も早や消えた。自分も此事には幾分揚はつたのを、其さへはや忘れやうとして居た矢先、偶爾した事から露子の生涯を聞き出して、種々哀れな、悲しい事を細かに知る事になつたものだから、竟に感慨措く能はず、禿筆を呵して此篇を起す事となつたのである。

曜貢に掛けたもの夫々方が附いて、家の中はまるで空明戸、外には唐様の捻つた字で貸家の札が懸つてから、彼是四五日も經つた頃、朝疾く自分を訪ねたものがある。

取次の者が名刺を渡して、お目に掛りたいと有仰ますと傳へるのを見ると、

有馬壽太郎

ハテ、何處かで此名は見た様だ。何處だらう。かうつと。ム、然だ、マノン、レスコーの巻の首の頁。夫だ。が露子に彼書を贈つた漢

が自分に何の用があるだらう。全然判らない。何しろ『まあ直ぐに其方を通しておくれ。』

這入つて來たのは褐色の髪毛蓬と亂れ、面色蒼白く、秀削と高い青年が、多時着更も爲ないらしい旅裝束のまんま。しかも巴里へ着いてから刷毛一つ當てないと見えて袖も裾も埃塵。

有馬氏は非常に激して居たので、別に其を隠まうともせず、兩眼に涙を湛へ聲慄はしながら『失禮な服裝をして、突然伺ひました段は幾重にもお詫を致します。まづ若い者の事ですから、禮儀は可い加減にして戴きまして。實は今日是非貴公にお目に懸りたいと存じまして、先に荷物を送り付けて置いた宿屋へも未だ寄らずに、朝も早いながら、お出掛におつたお不在へでも參堂る様ではと心配して出ました次第で。』

自分は有馬氏を暖爐の邊へ延いて席を勧めると、彼は衣帛

から半巾を取出して、涙に咽ぶが如く暫く其面を蔽ふて居たが、悲しけに重き太息、屢ば話を途切らしつゝ。

『一面の識もおひ人が、今時分、斯様服装で、御覽の通り涙ながらに伺つた理由は、決して貴公にはお解りにはなりますまい。が實は貴公に折入つてお願がございまして。』

『然ですか。イヤ、出來ます事なら何なりと。』

『貴公は後藤露子の競賣にお出になりましたですか。』

一時辛かに屢へ付けて居た感慨が、此一語を發すと共に痛く亢ぶて、堪へ切れなくなつたのが、急いで兩手に眼を蔽ふた。

『貴公のお眼には嘸私は馬鹿氣て見えるでございましやうが其邊は何卒お宥し下すつて、お願ですから、御迷惑でも、暫く、私の申上るのをお聞き下さい。』

『私の身に出來る事で、貴公の悲傷を幾分かでもお慰め申事が出來る樣でしたら、決して御遠慮なく、有仰つて下さい。聊かでもお役に立てば私は誠に結構です。』

有馬氏の悲歎は實に氣の毒、誠に可哀想であるので、自分は我にもあらず、奈何にもして彼を慰めてやりたいとの心になつたのである。

有馬は徐ろに

『貴公は露子の競賣で何か御購求になりはしませんでしたか。』

『ハイ書物を一冊。』

『マンノレスコーといふ。』

『ハ、然です。』

『其書物は未だ御所持でございますか。』

『エヽ、有ッてゐますとも、寢室に置てますよ。』

有馬は此一語で宛も重荷をおろした樣に見えた。自分が此書物を手離さずに有つて居た丈で早や一つ望を叶へて遣つたものらしく、彼れは頻りに謝辭を述べるのであつた。

自分は席を起ち、部屋から書物を取て來て渡すと、

『確實に此です。』

彼は一枚目の寄贈辭を打眺め、更に二三枚繰り返して、

『慥かに此です。』

點々と紙に墨あり霞なす男の涙二滴。

『時に、』とやをら顏を擡げた。其泣た顏も今又將に泣からとするをも隱さんとせず。

『貴公は此書を御秘藏でございますか。』

『何故です。』

『實はこれを私に御讓を願ひたいので伺つた譯なので。』

『ハ、ア。甚だ妙な事を伺ふ樣ですが、夫ぢや後藤露子に此書物を御贈りになつたのは貴公なのですか。』

『左樣、私です。』

『差上ましやう、御持歸りを願ひ舛。貴公に御返却する事が出來て私も滿足なんですから。』

有馬氏は當惑した風で。

『併し、其代りには尠くとも貴公の御拂になりました價段丈は差出しますでございます。』

『何有、進呈いたします、那麼競賣なんかで唯た書物一冊位の價は實に無代の樣ですからね。夫れに幾何でしたか記憶ても居ませんよ。』

『貴公は百圓で御購求になつたのでせう。』

圖星を指されて今度は自分が當惑した。

『左樣でした、如何して夫を御存知ですか。』

『外でもないのです。私は彼の競賣に間に合ふ樣に巴里へ歸る意でしたが、遲れて漸と今朝着いたのです。實は何か一品でも彼の遺物が欲しいものですから、執達吏の處へ駈け付けて、賣品購求者の姓名を調べました處、貴公が此書籍をお求になつてゐるが、餘程高く御求めになつた樣子で、察すると、或は此書物を御所持ゐさるには、隨分運山もおありの事ならうと思ひましたが、厚げて私に御讓を願はうといふ決心で伺つた譯なのです。』

有馬は露子と關係が有つたので、自分も同じやうな關係がありはせぬかと、內心頗る懼つた樣子が見える。

で自分は之を安心させやうと、急いで、

『私は露子さんは見た事がある計りで、別に懇意といふ譯ではないのです。彼の人の逝れたのは私に取つてはいはゝ別に何でもないので、誰しも若い漢は美人を見るのは惡るくはないと時々逢ふのを樂にして居た婦人が、偶死ねば、決して嬉しいとは思はないですね。私が露子樣の訃を聞いたのは恰度此位で、其以上の事はないのですが、何か賣つて貰きたいと思つたから、此を賜上げたが、之には理窟も何も無いので、暗に私と競爭した人を驚かせやうとして、いはゝ意地づくに買た譯なんです。更めて申ますが、此書物は貴公に差上ますから何卒御受納を願ひたい。私を競賣人同樣に思つて下すつては困ります。から、代價なんぞは有仰らないで、其代りには、之れを御緣に、末長く御懇意に御交際の程を冀望します。』

有馬は手を差延べて自分の手を堅く握りながら、

『頂戴致します御厚意の段は生涯忘れは致しません。』

此書籍に書いてある寄贈の辭、此男が夜を日に次で巴里へ歸つて來たの、又此書籍が是非欲しいといふ事、凡て皆自分の好奇心を刺戟したので、自分は押しても露子の事を訊ねたくて堪らなかつた。が併し、書籍の代價を取らおかつたのは結局他人の事に嘴を容れる權利を買て、根掘葉掘をしやうの魂膽と思はれはしまいかと、胸はときめく程であつたが、少時有馬の顏色を窺がつて居た。

すると彼は自分の心事を洞察たと見えて、

『此本は御讀みになりましたか。』

『ハイ、全部。』

『では私の書いた二行の文句に就ては奈何お考へになりました。』

『私の考へでは貴公が此書を御贈與になつた婦人は餘程變

物だつたに違ひないと思ふのです。眞逆貴公のお書きになつたのが無意味ぢやありますまいからね。』

『左樣です。其通りです。那女は天女ですよ。これ、之を御覽下さい。那女の手紙です。』

取る手遲しと開封すると其文言。

『御手紙たしかに受取申候。不相變御親切の御仰、しみ〴〵嬉しく幾重にも御禮申上候。私此度の病氣、とても助かるまじく、やがて消ぬべき殘の燈ながら、優しき御前樣の御志を思へば、幾分か苦しさも忘らるゝ心地致候。唯今御懷かしき墨の痕拜し候につけても、長からぬ生命引き延ばし、此手紙御認め遊ばされ候床しき御手に縋り、心殘りなく成佛致度と、いとせめて心に念じ候得共、とても相叶ふまじく、若し此世に私の病に適ふ藥有之候はゝ御前樣の嬉しき御便の

外無之事と存じ候。思へば〳〵果敢なき身の上にて候よ。最早あの世へ參るも遠かるまじきに、命と頼び御前樣は、遠き旅の空に被爲居候事なれば、とても御目もとの程慨ふまじく、さり乍ら、却て是も仕合かも知れ不申、私事今はあはれ見る影もなく、昔の露子の俤かたばかりも殘さぬ迄に變り果て居候へば、御覽被下候も御互に涙の種に可有之候。

『過ぎし日の無情は宥せよとの御仰、宥す許さぬなど、他人がましき御仰は、いつそ恨めしく、命に替ても二人が中の情は立て通し度き心底御察し被下度、いつそや妾を御密しめ被、遊候事有之候ひしが、是も御前樣私いとしと御思召被下故に候へば、私如きを然迄もと、蔭にては兩手合せ嬉し涙にむせ居申候。

『病氣に罹りて一月に相成候が、唯御前樣の御心に適ひ度と、身の中此心より外無之候まゝ、御別れ申てより、筆行る力のつ

きはて候迄、毎日日記相認め、紙一枚の下には御身在しまし、筆の動くまゝに御覽下され候やうに思ひながら、御前樣の膝にかゝり、心の底の底を申上候つもりにて、一念を此一冊に封じ込申候。眞實私不慨と思召被下候はゝ、御歸國早々、佐野百合子御訪下され、日記御受取被下度、これ御覽被下候はゝ、從來の行違ひ、總て御解りに相成るべく、神かけ其日を相待申候。

『百合子は誠に親切の人にて、二人集れば大抵御前樣の御噂にのみ相暮し居申候。御手紙屆き候節、丁度百合子も在合せ、拜見致しながら兩人涙にくれ申候。此度の御手紙下さらずとも御前樣御歸國の砌、私の日記は是非〳〵差上申べき樣、茨くに相定め置たる事に候が、これは素より私のつとめ、つゆ御悅び被下まじく、唯々それ御覽被下、これ迄の疑念御はらし被下候はゝ、それこそ私にとり、千借萬借の供養にもまさり、嬉しく成

佛可致、唯今にては過し昔の嬉しかりし事ども思ひ浮べ、獨り打慰め居申候御推諒被下度候。

『切めては何かと紀念の品御前樣へ相遺し申度候へ共、皆差押へと相成居り心に任せ不申、鬼の樣なる金貸共、品物の紛失せぬ樣と、番人を遣し居り候が、末長からぬ病に惱む私の枕頭に、意地惡き番人のあちこち歩行く音、手に取る如く打ち響き心惜さ譬へんに物なく候、萬が一にも天運ありて私生殘り候とも、一物も殘らず賣り拂はれ可申筈に候間、寧生きて有品賣られんよりは、疾うあの世へなど思ふも病の所爲のみには有之間敷や。

『男といふものは誠に〳〵つれなき者よとつく〳〵思ひわび申候、否つれなきを男とのみ心得候は妾の誤り、正しく、惠深く、いつも變らせ給はぬは神樣ばかりにて、人の心の頼み難き

は、此頃よく〳〵得心致申候。

『何か相遺し度候得共、些細の物にても藏し候事相知れ候はば差押品いんとくの罪とやらにて、御前樣へ迄御迷惑相掛け可申哉も難計候まゝ、競賣の日には是非御越被下、何なりとも御求め被下度候。

『今日私の身の上のあはれさ、譬ふる物も無之、御情ふかき御前樣奈何樣に御推諒被下候とも、今のありさまは御わかり相成申間敷と存候。

『一生の思出に切めて今一度御目もうじ相叶ひ候樣只管神樣に念じ居候。よしうどんげに花咲きて御目に掛られ候樣相はこび候とも、念の爲今日御暇乞申上置候、女心の申上度き事ばかり、筆とめるは何とやら御別れ申樣にて、誠に〳〵名殘惜く、御前樣にもあまりとや短き文章にて、嘸ぞ本意なく思召さ

れ候事と、よく〳〵承知致居候得共、此間中御醫者樣はじめ北他の方々、病氣なはす爲として私の血をお取りに相成候爲此上相認め候力なく、惜しき〳〵雖とめ申候、御許し被下度、まづは右まで〳〵。

懸しき壽太郎樣

奈何樣、終りの宛名など殆ど解らぬ位であつた。

自分が讀で居る中、有馬は勿論一字一句暗んじて居やうから、再心の中で之を讀み返して居たに違ひない。で手紙を返すと『チー貴公、決して是は固ひ者の書く手紙ぢやないです。』と彼は往事を回顧して、感慨に堪へざるが如く、良多時手紙を熟視て居たが到頭之を胸に中て雖と兩手にかき懷きつ。

『到頭死目に逢はないで死なれたのか。この當來、再と會へな

いのか、可、姉妹も及ばん事を爲て呉れたのに、見す〳〵那麼にして殺して了つたのは、實に、實に殘念です。否濟まないです。惡るかつた。眞に、惡かつた。が取て返しがない、死んで了つて、可、私の事計り思つて、私の名を書きながら、私の名を呼びながら、到頭お前は死んだのかい、露！到頭死んで了つたのかい！』

有馬ははや物狂はしき迄、悲、まず悲み、哀まず泣き、突と手を伸べて緊と自分の手を握りながら、

『那麼婦人が死んだからつて大きな漢が泣くのを見たら、定めし世間の奴等は嗤ふでせう。青二才だと言ふでせう。が奈何程私が那女に苦勞をさしたか奈何程酷く窘めたか、甚麼に那女が從順かつたか、優しかつたか、噫、噫、可哀さうに、誰一人知つて呉れた者は無いのです。今になつて考へて見ると、先方から謝罪せるのは轉倒で、當然なら私が謝罪るべき理だつたので

す。那女は私の爲た事を許してはくれましたが、私の罪は却々酷くつて到底宥るして貰へる譯のものぢやないのです。嘸私は、私は一時間那女の脚下に伏して泣くが爲に、十年の壽命を縮めても決して遺憾には思はんです。』

人の悲歎の因由が解らないでは、奈何に慰めやう、慚さうつた所で却々困難いが有馬は自分の前を憚からず、泣きたい丈泣いて毫はどの隔意がないので、自分も深く同情の念を動かされ、假令一言でも幾分彼の力になるに相違ないと乘り出す氣になつた。

『貴公には御兩親がお在りでせう。友人もお在りでせう。決して力を落すには當らない。確乎して、御兩親なり友人の許へ行つしやい。屹度慰めて呉れるでせう。私にして見れば唯お氣の毒だ、お可哀想だと計りで用に立んですから。』

『ヤ御道理實に下らん事をお聞せ申して御迷惑です。』

とやをら椅子を離れて室の中を徐かに歩行きながら、

『どうも失敬しました。私の悲歎は貴公に取つて何でもないので、ツイそれに氣が注かないで、貴公には毫か關係もなく、關係のあるべき理由も無い事で以て御迷惑をさせました。誠に濟まなかつたです。失敬でした。』

『否、然お考下すつては困るのです。私は貴公の爲に能る限りの事は爲たいのですが、唯私では貴公をお慰め申す事が能ないので、甚だ殘念です。が若し私は勿論、私の友人とお交際になつて、少でも氣が霽れるやうでしたら、甚麼事でなりとも、私でお役に立つ時分には私は全く心から悦で爲る考へです。』

『イヤ失敬、失敬でした。ツイ這樣辭々して居ると神經が過敏になるものですから、甚だ失敬しました。可い加減にお暇した

いのですけれども、大きな軀體をして市街の眞中で泣いて、馬鹿野郎共に後指さゝれるのも不快ですから、泣つ面の復る迄、今二三分間此處に留いて戴きます。せう。私はもう此書籍をお讓り下すつて、嬉しくつて堪へられないです、如何してお謝禮をして可いか知りませんが。』

『其を御緣にちと御願意に願へば結構、お支障がなければ御懇傷の因緣をお話し下されば尙更です、一體心に保つて忡々思つて居るのを、他に話すと餘程樂になるものですよ。』

『眞實です。今日は餘り泣けて來て、充分お話する事が能ません。他日日を定めて全部お話を致しますから、然したら私が那女の事を這樣歎くのが萬更無理でないといふ事が御了解になるだらうと思ふのです。』

と又更に兩眼を拭ひつ、鏡と鏡を見て、

『誠願今日の處は眞逆捨てた程の白痴でもないとお考へ置きを願ひます。何れ再參堂でお目に掛りますから宜しく。』

有馬は優しい目で自分を懷かしげに睨めた。自分は既う前後を忘れて、突と彼を搔き抱かうとすると、彼の兩眼には再熱い涙が一杯に溢れかゝつてゐる。パッと心着いて有數に突と頭を反けて了ッたので、自分は聲を勵まして、

『君、確乎したまへ。』

『ぢや左樣なら。』と沈んだ調子。

齒を噛締め息を殺し、拳を握つて一生懸命、涙を呑つゝ室を出た。否殆ど突喊の勢で飛び出て往つた。

自分が窓掛を揭げて見て居ると、戸外に待たせて在た馬車へ腰を下したかと思ふと疾や堰を切る大河の流、堪へ涙が一度に切れて、手疾く手巾に深く面を掩ふて了ッた。

五

其後日も餘程經つたが、有馬の事は毫も耳にせず、却て椿姫の噂は絶へず聞へて來る。

讀者に這麼經驗が有るかは知らぬが、自然の成行で從來些とも知らなんだ名前又は聞いて居ても氣に留めなんだのが、偶した動機から、之を聞くと種々其名に屬た事が心の中に集つて來て、從來友人の口から聞た事もない事件を聞く樣になる。

這樣なると其人物が自分と極近しくならうとしてゐたもので、自分こそ氣が注かなんだが、始終自分の眼前を往來した事も考へ出せるし、人の譚に聞く事と、自分が實際遭遇た所と、符節を合せる樣でおるのを思ひ出して來る。

自分が椿姫に對するのは即ち是であつた。自分は確かに露

子を見もし出會ひもし知つても居り、噂にも聞いて居たので、所が例の競賣以來彼の名前は度々自分の耳へ響くし殊わけ有馬との對話以來、椿姫といふ名を聞くと直に、かの深沈痛切な悲歎が聯想されるので、自分の好奇心と、獵奇の心とは比例を爲して高つて來た。

之が爲、友人に出會ふ毎に、曾て椿姫の名を口にだにした事のない自分が、開口第一、先づ問ひ出すのは屹度如斯いふ鹽梅。

『君は後藤露子といふ婦人を知つて居るかね。』

『椿姫かい。』

『ウム其だ。』

『那か、知つてゐるとも、熟く知つてゐる。』

といふ答が、時には微笑と共に出るので、其意味は勿論解り切て居る。

『フム、全體甚麼女だッたんだへ。』

『好い婦さ。』

『其丈か。』

『然さね。普通の婦人よりは賢こくつて、情も少しは厚かッたね。』

『何かもッと細かい事はないかね。』

『G男爵が那女の爲に破産したさ。』

『尙無いかい。』

『公爵の情婦だッたよ。』

『眞箇に情婦だつたのかい。』

『其樣な評判だね。何しろ公爵が那女に注ぎ込んだ金額は莫大なもんだからな。』

大體の事は平常も違はないが自分が殊に知りたいと思ッてゐるのは、椿姫と有馬との關係なので、或日名の通つた婦人と始終交際つて居る男に逢つたものだから、早速また例のを初めた。

『君は後藤露子を知つて居たかい。』

返答は御仕着せ通り『ウム熟く知つてゐる。』であつた。

『一體甚麼婦人だッたのだ。』

『容色も良し氣質も善しさ。那が死んだとは眞に惜しいよ。』

『椿姫の情夫で有馬壽太郎といふ男があつたかね。』

『身丈の高い、色の微白い、毛髮の美しい男？』

『然々。』

『夫なら違ひなし。』

『有馬といふのは一體何者だえ。』

『有馬といふのは大した金も有て居なかつたのだが、兎に角

全部椿姫に入れ上げて、到頭別れなけりやならん事におつたのさ。人の談では有馬は其以來狂氣の樣になつてゐるといふがね。』

『で椿姫の方では？』

『椿姫の方でも甚く惚れて居たといふ事だな。併し何といつても商賣人の惚れ方で、那樣いふ婦人に魂打込んで惚れて貰はうつたつて其は無理さ。』

『有馬は其から奈何したの？』

『知らないね。全體僕等は那の男を餘り知らないんだから。兎に角五月か六月の間露子と一緒に田舍に在たので、露子が巴里へ歸つた時分には既う別れて居たのだ。』

『其後君は有馬に逢つた事はないかい。』

『一度もなし。』

自分も有馬に逢はないのである。で少し疑ひの念が崩して來た。那の時露子が死んだといふので、有馬の心の中は、昔の戀の餘燼が、浮氣ッぽく燃え上つて、夫で那麼に愁歎したのではあるまいか。果して然として見ると、既う女の事は忘れて了てゐるのだらう。就ては再逢ひに來ると言つた自分との約束も忘れてゐるのであらう。併し、左樣一概に言つたものぢやない。どうも那の男の悲歎には確かに赤誠があつたよ。那の男に限つて其麼浮氣ぢやない。然だ。餘り歎いたものだから、病氣になつたのだ。然だ、病氣だ。夫で來ないんだ。病氣々々。否病氣どころか死んで了ッたのかも知れない。

思はじとしても何となく有馬の事が氣に懸る。尤もこれには幾分か利己心もあるのかもしれない。何やら自分は彼の悲を察て此裏には頗る哀れな戀愛の奇談が潜んで居る事と定

めたらしく、有馬の音沙汰がないので氣がもめるといふものの、幾分其一伍一什を聞きたさが手傳て居るのらしい。

で有馬氏が些とも來ないものだから、自分は躬ら出馬して訪問する事に決心した。往にすれば其口實は何となといへる。が、生憎先方の宿所が解らない。誰彼に就て種々と尋ねたが誰も知つた者はなかつた。百計茲に盡き、到頭安丹街へ往て、露子の代言人を訊ねて見たが此頃其家の代が代つたので何にも御存知なし。仕方がないから露子の墓所の在所を尋ねて見た。

墓は摩篤山墓地ださうな。頃は四月の空も長閑に、墓とはいへ、冬のやうに凄愴の鬼氣人に迫るやうな事はないので、まづ生きて居る人は、先立て逝た者を追想して墓參の一つも爲やうといふ、暖かい時候である。

自分は墓を指して往きながら、獨り自ら呟いた。

『然だ、露子の墓を一瞥見りや解る。有馬が尙悲んで居るか奈何だが。有馬は奈何なつたか、直ぐた。』

自分は墓守の小屋に這入つて、二月二十一日に後藤露子といふ婦人が此墓地へ埋葬せられたか否やを訊ねると墓守は咳一咳徐ろに埋葬帳を繰返して調べて、

『エ、二月二十一日、正午十二時ですな。後藤露子といふ婦人が埋葬になつてゐます。』

夫ですと案内を賴んだ。御承知でもあらうが、墓は街道で、娑婆の市と同樣澤山に通があるから、案内なしでは却々解りはしない。墓守は墓番を喚で、命令を傳へると、墓守は辭を遮つて、

『エ、知つてます知てます。那墓は極く解り易いのですもの。』

『何故。』と怪んだのは墓守計りでない。自分も妙に耳が引立つた。

『何故知れるッて貴方、那の墓に供へてある花は全然他のとは異ふのですもの。』

『其墓の番を爲てゐるのはお前かへ。』

『左樣でございます。若いお方が私に花のお指圖を爲すつたので、御親類の方が皆那の位に死人を思つて下されば結構なんでございますが。』

いひつゝ自分を案内して、石碑の間を幾迂回、番人は立停つて、『此でございます。』

果然、見ると咲揃つた花が四角形に行儀よく挿してある。其華麗さといつたら、宛で墓とは思はれない。唯中央に名を彫り付けた眞白な大理石が建てゝあるので夫れと知れる位で其の傍と立つてゐる周邊には地も見えぬ迄に一杯の白椿、外廓には鐵柵が繞らしてある。

『奈何でございます。』と訪り顔に番人は尋ね掛けた。

『見事なもんだね。』

『椿が萎れると挿替るやうに吩咐つてゐるのでございます。』

『誰から。』

『お若い旦那ですよ。其方が此處へ始めて光來た時に聲を揚げてお泣きでした。多分前に此死人と關係のあつた方なんでせう。人の話ではそれしやだつたッてえますから別嬪だつたんでせう。貴公御存じで在らッしやいますか。』

『アヽ。』

『依樣ね、他の旦那方御同樣で。』と委細心得た笑ひ方。

『何有、俺は物を言つた事もない。』

『夫で貴公は御參詣なすッたのですか。感心でございますな。那の女に關係の在ッた人さへ來ないんですもの。』

『誰も來ないかへ。』
『誰一人來ませんよ。一度例のお若い旦那樣が見えたッ限。』
『唯一度？。』
『左樣でございます。』
『夫ッ限來ないかい。』
『見えません。がお歸りになれば見えるでせう。』
『何處か往てゐるのか。』
『然。』
『何處へ往つて居るんだね。』
『後藤樣の妹樣の許だらうと思ひます。』
『何の用で。』
『その、死骸を掘返へして、他所へ埋め替へる許可を貰ひに往しつたので。』

『ハテナ、何故此儘にして置かないのだ。』
『夫れは貴公、屋有る奴でしてね。誰しも死人に就ては妙な事を考へてゐる者でさゐねえ。此處の墓地は五年間しか買切になつて居ないのです。所があの旦那は最と大きい地面で何時迄も借りて置ける所にしたいと有仰るのです。そりや新墓地の方が良うがせうよ。』
『つい其處の左手に賣地があるのです。是で今の通りに墓を手入れして往かうもんなら、世界中に恁麼墓はございませんなゝですが墓を左樣しないでも未だ夫迄には澤山爲る事はあるのですが、人間といふ者は可笑しなものですて。その墓へ來てまで威張りたがるのでがさあ。此露子樣なんぞは、失禮ですが僅の些と娑婆を覗きに光來なすつた樣なものでがさあ。今ぢやもう死去なすつて、骨もなけりや皮もなし、何一つ殘つた

ものなく、まあ私が斯樣して毎日花に水を掛けるのが此方の紀念位なもんでせう。可うがすか。夫れに此露子樣の墓の近處へ死人を葬ると、其親戚の方が奈何かした拍子で露子樣の職業を聞込む。となると、サア事なんでがす。斯樣いふ婦人は何處か別に埋める所を拵へたら可からう。恰度貧乏人の墓が別にしてある樣な工合に、普通のとは離して貰ひたいものだ。なんかと好な事を言ひ出すので、私はもう、斯樣いふ婦女の方などは極尊敬して肩を持てゐるでがす。御承知でせうが、威張ってゐる旦那衆が何をなさるかと思ふと、一年四度墓參をなさる。しかも御自分で花を持てお參詣になる。夫は結構でさあ。夫で墓の手入を七面倒臭くお調べなすって、泣く眞似をなさる。夫もまあ可うがさあ。涙一粒零しも爲ないで、泣いた樣な事を石に彫り附ける。さうして置て揚句の果が近處に離の墓

があるの、他所へ移つたら可からうのと、近處迷惑の事をいふ、是れは實に怪しからんです。』

滔々數千言鋒鋩當るべからずで、自分は默つて傾聽して居ると番人先生また語を繼いだ。

『まあ私の言ふ事を僞とも眞實ともお思召次第にお聞き下さいですが、私は些とも此婦人は知らないのです。甚麼事を爲すッたかも知らないのです。が私は可愛いと思つてますから、心を盡して充分のお世話をしてゐるのです。――椿の花も極安くして差上げますがね――何しろ露子樣は私の一番好きな死人ですからな。笑ッちや可けません。私共は大層忙しいもんですから到底他の者を可愛がッてゐる暇がないので、詮方なしに死人を可愛がるんです。』

相變らず自分は無言で、番人を跳めて居た。此間自分の感慨

は敢て説明するまでもなく讀者の疾に認して居られる所であらう。墓番は甚く自分の感ずつて居るのを認めたものと見えて又語を續ける。

『人の呼で聞きますと、此婦人の爲に身代を壞した人もあり又此人を神樣の樣にして居た人もあるさうです。が、今となると、露子樣のお供養にッて花一つ買ふ人もないかと思ふと、ねえ貴公、全く奇體に思ひますわ。悲しくもなりますわ。併し露子樣だッて何も不足はありやしません。墓は自分の有ですし、唯一人でも忘れないでゐてくれる男があれば、それでもう澤山でさあ。

『けれども此墓の中には尚々斯樣婦人が澤山ありますよ。年格好から何から何までよく似たのがね、夫が貴公何うでせう。貧乏人の墓場へ投り込まれてゐるんですぜ。私やもう實に可

哀想で堪へられんのですな。世間の奴等の薄情さ加減ッたら無いや。死んで了ッたりといふと一人だつて思てやる者はないんですからな。可厭だ〳〵。全く可厭な商賣ですよ。戀ひ少しでも人間並の情愛を有てゐると眞に可忌になりますよ。

『私に一人壯健な良い娘が丁度今年二十歳になりますが、其年齡の婦人が此墓へ來ますと大家のお姫樣でおらうと、裏店の淫奔娘だらうと、ついのです。オヤ滿らんお談話をしてお暇をつぶさせました。怎樣談を聞きに光來たのぢやございませんのに。誠に失禮。左樣左樣。露子樣の墓を御覽の筈で、即ち此でございます。まだ何か御用がございますか。』

『お前有馬番太郎樣の宿處を知つてゐるかい。』

『エヽ、ハイ』

といつれともつかぬ生返事。自分も此男で解らなけれや、一寸手蔓に困るがと勢よく、

『知つてゐるだらう、何處だへ。』

どきッかけを付けると。

『エ、〇〇街です。兎に角始終私が此の花の代を頂戴に出る所は其處なんです。』

『ア、然かイヤ難有ら。』

自分は更に花一面の墓所を凝と見た。實は地の底までも洞觀して、茲へ埋められた美しの人の姿が甚麼に凝つて居るだらうか、一つ見届ける意であッたので。

さて悄然と歩み出すと、番人も自分の傍に跟て歩ながら。

『貴公は有馬樣にお會ひになりたいのでございますか。』

『然だ。』

『ハ、ア、多分未だお歸りにならないでせうよ。然もなければ此處へ光來ッしやる筈ですから。』

『有馬樣は露子の事を忘れて了ッて居やすまいか。奈何だね。』

『奈何して貴公、忘れる所の騙ぢやございません。有馬樣が墓を移やうと有仰るのは結局今一目露子樣を見たい計りなんです。何ら賂でも致しませう。』

『何故其が解るね。』

『夫といふのは、那の方が初めて此墓へ見ました時、有仰ッた辭が如何なんです。』

『如何したら今一遍露子が見られるだらうッて。ね、此奴はその、墓を變るより他仕方が無いのです。夫で私は一々移轉の手續を巨細に申上げました。』

『御承知でもございませうが、屍骸を他の墓へ移すには、掘出

して、本人か否を見定めて、夫からなんです。夫には丁と巡査がお指圖をなさるんで、親戚の者でなければ之が應へないです。それだから有馬樣が露子樣の妹樣の許へ光來たんですよ。さうすりや、もう有馬樣がお歸りになれば、一番に此處へお光來になるに決ってますさわ。』

話しながら何時ともなく墓場の出口へ來たので、再び墓番に謝辭を述べ、若干の祝錢を握らせて、敎はつた所へと足を向けた。

家は知れた、有馬の泊つて居る事も確實であったが本人は未だ歸つて居ない。で歸ったら直ぐに自分を訪ねるか、左もなくば、手紙を寄して、面會の場所を知らしてくれる樣に言ひ遺して立歸つたが心甚だ穩かならず。

翌朝有馬氏から手紙が屆いた。急ぎ開封して見ると、先づ歸

國を報じ、疲勞甚敢、迎も參堂致兼候儘乍恐縮何卒御來訪被下度云々と文は甚だ簡單ながら、自分は之を無限の秘密の緒よと、胸自からときめく樣に覺えたのである。

（六）

自分が訪問すると有馬は蹲の上に寢て居たが、突と逆出した手を握ると宛で火の樣。

『君は大變熱があるよ。』

『何有、急いで旅をした疲勞なんで、何でもないのです。』

『露子の妹の許へ往しったのですってね。』

『ハイ、誰にお聞きでした。』

『夫は知ってますよ。で、目算通り旨く運びましたか。』

『ハイ、ですが其處事誰にお聞きでした。』

『墓番から。』

『ぢや墓を御覽になつたのですか。』

自分は殆ど能う應答をかつた。といふのは有馬の言葉の調子で、自分が前に見た例の激しい悲歎の情が尙活々と殘つてゐるのが知れるし、話柄の勢や何かで、心が其に觸れると、忽ち感慨が充ちて來て抑へても抑へ切れぬ樣子が、顯然と見えたから、自分は僅かに默頭いて應答の意を示すに止めた。

『墓番は善く手入をして居て呉れたですか。』

露か涙か二滴病にこけて蒼ざめた頬を流れ下るを、我に見せじと頭を反けたので、自分は知ぬ態を粧ひつ話頭を反らさうとして。

『三週間約お掛りでしたね。』

有馬は手を揚げて、それとなく眼を摩ッた。

『恰度三週間。』

『隨分長い旅行でしたね。』

『否、其間ずッと旅行をして居たのではないのです。二週間病氣でしてね。然でなかッたら疾うに歸つて居るんですよ。丁度彼地へ着くと直ぐに此熱病に罹ッて了ッて、出る事が能なかッたのです。』

『本當に癒らない中に發ッて光來ッたのですな。』

『併し今一週間も逗留して居やうものなら屹度彼地で死んで了ッたでせう。』

『驚れにしても無事にお歸りで何よりです。充分御自愛なさい。何れ友人方も來て看病もなさるでせう。貴君さへお支障なくば、僕が眞先に參りませう。』

『何有、もう二時間もすりや起きますよ。』

『夫は可けない。』

『だつて起きなけりやならんですもの。』

『何がさう急ぐのです。』

『僕は警察署へ往かなくちやならんのです。』

『誰か友人に頼めば可いぢやありませんか。其處無理をすりや身體を惡くしますよ。』

『否、これが私の病氣を癒す機會なんで、之を取外すと生涯に再と無いです。私は如何しても一日那女を見ないでは居られないので、抑も那女が死んだといふのを聞いてから、殊に惡を見てから以來、毎晩眠られた例なし。奈何考へて見ても、つい此間別れた時、那處に若くて、那處に美しかつた者が、今眞例に死んで居るとは受取れないのです。だから其證據を見て得心がしたいので、至體神樣が、那樣に私が愛して居た女を奈何お變形なすつたか、見れば長れて縮み上るでせうが、夫で却て良からう。と如德思ふのです。甚く御迷惑でさへなければ一緒にお出下さいませんか。』

『妹樣は何と言ひました。』

『何にも言ひませんが見ず知らずの男が、地面を買て、露子に呉れやうといふには、聊か驚いた樣でしたが、直ぐに承知して調印して呉れましたよ。』

『惡い事は言はないから至快する迄延ばしたまへな。』

『決して御心配下さいますな。既度是で快くなりますよ。私は是非爲ようと思つた事を若し行らないと夫こそ氣狂になりますからね。』

自分は酔を遮ぎつて再び止めやうとしたが、耳にも聞けず言を繼けて。

『斷言します。僕は露子を見ない間は、霧の有馬にはならない

です。尤も其奴は熱の所爲かも知れません。毎晩寝ないで夢を見てゐるのかも知れません。幻のやうなのかも知れません。が假令私は見た後はランセの樣に坊主にならうとも是非一度は見ます。』

『解りました。何なりとお役に立つ事があれば致しませう。時に佐野百合子に合つたですか。』

『エ、歸ッた日初めて逢ひました。』

『露子樣が書遺した日記をお受取りでしたか。』

有馬は其枕の下から一冊の紙を取出したが直ぐに又引込めた。

『私は既う此紙に書いてある事は全體暗記して居ます。毎日十度宛之を讀んだのが今日で恰度三週間。何れ御覽に入れますが今少し經てから私の心も沈着て、此日記の中に書いて無

い事を、巨細にお話が出來る樣になるまで、お待ち下さい。所で唯今一寸お願み申したい仕事があるのです。』

『何ですな。』

『貴公の馬車は待て居るでせう。』

『ハイ。』

『ぢや一つ郵便局へ往て私宛の郵便が來て居ないかお尋ね下さいませんか。私は田舍へ行く時甚く急いで發ッたものですから、夫も見ないで往きましたが家嚴からと妹から手紙が來て居るに違ひないのです。お歸りになりましたら、御一緒に警察署まで往て、明日の手續を致したいので。』

自分は直ぐに往くと、果して手紙が二通屆いて居たので、持て歸ると、はや有馬は丁と着物を替て出る準備を爲て居た。

『ヤ難有う。』と手紙を取つて、其名前を瞥と見、

『然です。家嚴と妹からです。屹度便をしないから不思議に思つて居るに違ひない。』

彼は手紙を披いたが、幾れも四頁の長文句、忽と眼を手紙の面に走らせて、其大意を推了したらしく、一分時も經たないのに既卷き納めて。

『ぢや出掛けませう。是は明日返事をすると。』

打連れて警察署へ往つて、露子の妹の捺印した書類を差出すと、代りに墓地管理人宛の命令書を與れた。之で改葬は明日午前十時、其一時間前に自分が有馬の宿を訪れて、一緒に墓へ出掛ける、といふ事に一決した。

今は讀者に向つて有のまゝにいふが、自分は明日立會つて見るのが珍しくッて樂みで、とう〳〵一夜まんぢりとしなかつた。で自分の經驗で推して察ると有馬の爲には、定めし長い

長い一夜であつたらうと思はれる。

愈よ翌日、午前九時といふのに有馬の室へ往くと、彼の顏は凄い迄に蒼かつた。が極々沈着いて居る樣子で、自分を見て微かに笑を洩し、手を伸べて握手した。傍を見ると蠟燭が心も殘さず燃盡したのが有つた。

いざ往からといふ時、有馬は二枚切手で不足稅ものらしい手紙を懷に入れた。父へ宛てた手紙で、確實に前宵の所感を細叙したものに相違ない。

凡そ半時間で麻篤樂山へ着くと、警官は既う來て居たので、徐かに露子の墓の方へ歩を移して行つたが、警官が先登二三歩後れて自分等二人。

時々有馬は頭の尖から足の爪先まで震へ渡るやうに、其手のぶる〳〵と顫ふのが電氣の如く自分へ傳はるので、疑と目

を揚げて彼を見ると、有馬に其と悟りつゝも、言ひ出し得で、唯自分を見て打笑むばかり。家を出てから此時も尙、互に一語を交さないのである。

恰度自分等が墓へ行き着かうとした所で有馬は立停ッて、顏に滴る球の汗を拭いた實は自分も何か重い物で胸を壓へられるやうに、言ひ知らず苦しかつたので、之を機に長い息をホッと入れた。

自分等は今眼の前に奇異の光景を見て物悲しいながらも一種の娛を覺えるのである。抑此娛の念は奈何して出るのであらう。是は疑問だ。

自分等が來た時分には既や花の株を取除けてあつて、外廓の鐵柵も取つて了ひ、二人の人足が頻りに土を掘返して居た。

有馬は側の樹に倚り掛ッて凝と見て居る。彼の生命、彼の精

靈悉く其眼から脫けて行くのではないかと思はるゝ樣。

突如鏗然として鋤嘴は石に衝つた。かと思つた刹那雷に打たれたる如く、有馬は突と飛び退いて、痛い程強く自分の手を握りしめたのである。

人足は鐵杖を取つて土を取り出しに掛つた。棺の蓋になつてゐる石が露れて來ると今度は一つ宛取除けるのであつた。

有馬は一生懸命に激動しない樣抑へ壓へて居るのは顯然と見えるが、然し、一瞬一瞬と危機に近づいて來るので、自分は有馬が今や卒倒しはしないか、今や、今やと氣が揉めて、細かに彼に注意して居た。が、彼は依然觀て居る。眼を据て、瞠と睜つて——喩へば狂人の樣に——びり〳〵。びりびりと双の頰と、唇とが打顫ふので、奈何に彼れの精神が危機に際して居るかゝ知られた。さらば飜へつて自分は如何だといふと、もう〳〵感

慶所へ來たのは一生の失策だつたといふの他はない。

愈よ棺となると、醫官は凜とした重みのある聲で厳かに命を下す『開けろ。』

人足は譯もなく命を奉じるので、宛がら漬物石でも除ける樣な調子。

棺は樫造、人足は既う蓋の螺釘を外しに掛つたが地の濕氣で螺釘の銹付いて居る爲に、隨分手數も掛つて漸やッと開いた。

棺は勿論芳香のある樹の枝で蓋ふてあつたのだが、蓋を取ると、得も言はれぬ異な香が芬と鼻を撲つ。

『南無阿彌陀佛々々々』

と器械の樣に有馬は呟いたさしづめ赤鬼青鬼ッ以て見るべき墓堀人足其人すら、たじ〳〵と後退つた位只看る大きな眞

白の經帷子の、死屍を掩ふて、緊と骸に密着いて居るのが、其一方は虫ばみ腐れて、顯れたる脚一本。

自分は殆ど悶絶するかと思はれた。今茲に筆擬つて其景を叙する時すら顯然と其光景が今見る如く憶ひ出されて、身も戰くのである。

『疾くしろ。』と沈默を破つたのは醫官。

人足も有繋に怖る〳〵經帷子に手を掛けて、其一端を取ると見れば、實如、死人の骸は赤裸々の儘に自分等の眼の前に曝された。おはれ其顏！

見るも凄じ、言ふも畏ろしの骸の狀や、鈴を張つた眼の往昔はなくて、中空なる孔二つのみ。花の唇消えて、歯々と白き歯の幾本。徒らに長く艶無き髮の、鬢と額を掩ふた條が、肉落ちて血の滴れた、淺ましい頰に懸つてゐる。がこれでも往時見た麗は

しく怡ばしげな俤が認められるので。

有馬は眼を反さうとも得為ず、口に當たて手巾を命とばかり噛切て居る。

自分の所感はといふと、鐵の箍を頭に嵌められ、覆紗に眼を掩はれて、耳に百雷を聞くの感で、幸ひと携へて居た夾神劑を取上げ呼吸の限り吸ひ込む位が漸々であつた。

此時警官が有馬に訊ねるのであつた。

『相違ないですか。』

『然』奈何にも沈んだ調子。

『ぢや、盞をして那方へ遣れ。』

とのお聲懸りで人足は舊の通り、經帷子に面を裹み、棺を閉ぢ、兩端に手を掛て新しい墓地へ移さうとすると、有馬は身動きさへも為ず、目は空の墓坑に据ッて、宛ながら今見た骸の樣に、

眞白になつて突立つた態は、其儘石になつて了ッたのではないかと思はるゝ樣。

今こそ眼に怖ろしい物を見て、氣が奪れて居るから可ひが、少し氣が靜まらうものなら大騒ぎと、氣が注ひたので、自分は、警官に向ひ有馬を指さしながら。

『此方は尙居なくてはなりませんか。』と訊ねた。

『否、餘程氣分が不快さうに見えるから、他方へお伴なさる方が良でせう。』

自分は直に有馬の手を把て『君、もう往かう。』

『何？』と有馬は尋ね復すので、自分の顏を忘れた樣に熟と眺めて居る。

『既濟んだのだ。往かう、往かう。ヨ、君、大層面色が惡いよ。オヤ體軀は冷たいやね。是は不可、サ、往かう。』

『然だね。チャ往から。』

と彼は器械的に答へた計、一寸の身動も爲やうとはしないので。自分は彼の手を把つて、伴れて歩行くと、まるで幼兒の樣に爲れるが儘に手を牽れて歩行くといふ調子。唯時々口の中で、『那女の眼を御覽でしたか。』と奈何やら其傳を度々想起して居るらしい。

歩行く程彼の歩武はしどろになるので、いはばびよい〳〵飛んで歩く樣。齒はがた〳〵いッて居るし、手は石の如くに冷え切つて、時々總身へ掛けて胴顫する容子。切めて氣を紛らせてやらうと話をしかけるが、默つて返事も爲ず。唯僅の手を牽かれて歩行けるといふ丈が漸々である。

門口へ來ると恰度馬車が待て居て、今發やうと云ふ所なので早速飛乘ッた。腰を掛けるが早いか、彼の胴顫は劇げしくなつて甚く心を痛めて居るらしかつた。其うち彼も自己の狀に氣が注いて、酷く自分が驚き恐れは爲まいかと思ッたものと見えて自分の手を緊と握りながら『君何でもないんですよ。唯泣き度び丈なんで。』と私語た。

涙こそ零さね、胸は動悸烈しく眼は血走ッて居るので、幸ひ持ち合せの爽神劑を嗅がせて遣つたが、寓へ歸つても未だ胴顫は止まらぬ樣子。

內へ這入ると直ぐに下人に手傳はせて有馬を寢臺へ寢かせ、傍で盛に火を焚いて暖ひて、自分は直ぐに親近の醫者の許へ驅付け、有つた事を巨細に話すと、醫者も急いで來て見れた。神經激昂、人事不省、切りに囈語を言ふが何も解らず、唯椿姫の名のみは折々明かに聞かれるので。

『奈何です。』と診察が濟むと自分は醫者に訊ねた。

『左樣、腦に熱を起したのですな。併し此でも却々結構なんで、此病氣が出なかつたら、氣が狂つて了ッたのに違ひない。軀體の加減が惡ければお醫て精神の方の病氣は起りますまい。一月もすれば身體は善くなりますでせうし、多分氣も緊乎するでせうよ。』

（七）

『病氣も有馬の樣なのは、直ぐに死ぬか、程なく癒るか、孰れにしても長びかないといふ取柄がある。病氣が發つてから、二週間もすると大分快方に向つて來た。此間自分は概床の傍に附切りだつたので、大の親交になつてしまつた。

花に葉に、鳥に蝶に、春の粧は闌なるに、有馬の室は恰度此美しい園生へ向けて開いて居るので、枯木も芽ぐます春の勢を込めた空氣が、夫から這入つて來る樣に思はれる。

既う起きて居ても可いと醫師の許可も有つたので、正午から二時頃迄、日の光の眞盛を眺めながら寢臺の上に起き上ッて種々の事語り續るのを日毎のやうにしてゐた。

有馬も病氣の所爲で、見た所はなか〳〵靜穩ではあるが、いづれ底には例の悲みが、大海の暗潮をなして渦を卷いてゐるに違ひないのだから、うッかり露子の名でも言ひ出して、これをよび出しては大變と、忘れても言ぬ樣に自分は心得て居たのだが、反對に有馬の方では椿姫の事をいふのが娛樂の樣な風、夫も從前の樣に涙含んでゝはなくて、嫣然と笑を洩らしながら爲るので、自分も大きに安心の思。

此間墓地へ往て、大病を起す程の怖ろしい的を見てからといふものは、彼の悲歎の情は病氣の爲に消えて了つたのらしく、露子の死去の事を想出しても決して以前の樣な感想は起

らないのらしい。つまり愈よ死んだものに相違ないと定ッたのが、幾何か心遣る便になつて來たのだろう。劃つて云ふと、例の怖ろしい幻影が時々に見えるものだから、之を消す爲に、努めて露子との嬉しい情交の時分を想起し其他は何にも考へまいと決心したのらしい。一方からいふと熱の結果と、療治の手續との爲に軀體が全然弱り切つて了つて、彼劇しい悲しみなどには身體が堪へなくなつてゐる。其上へ以て來て、時候が暮、世間一體、非情の草木迄がはしやぎ返つて居る中に裏まッた軀だもの、我にもわらず魂はふら〳〵と脱けて陽氣な方へ浮き出て居るので、

有馬は平常其病氣の由を故郷へ報せる事を嫌がつて居たので、今ぢや故郷の親父など、病氣だッたとは夢にも御存知なし。

32173

或日の夕方平素よりも晩くまで兩人で窓の側に坐つて居た。天氣は極麗かで、日は今や蒼と黄色の波を燦めかせつゝ、夕暮の靄の中へ靜かに眠らうとする所。巴里とはいへ四邊皆青葉の緑なので、殆ど人間界を離れて居る樣、時々自分等の話聲の中へ合の手に挿まるのは通り過りの車の響。

『僕が始めて露子に逢たのは時候も恰度今時分で今日の樣な日の薄暮でしたよ。』

彼は自分の話は開いて居ないで自家の胸中の聲を聞いて居たらしく、飄然と如何言ひ出した。自分は敢て答へやうとも爲なかつた。すると再語を續いで、

『僕は君へ全然其譚を爲る筈でしたね。君は其を書くでせう。誰も眞摘の事とは思ひはすまいが、兎に角面白いでせうよ。』

『夫は君、もう少し以後になつてから聞かうよ。ネー、君は未だ

32173

身體が健全でないんだから。』

『今日は隨分暖かですし、今日は雛を一人前食たのですから。』

いひつゝ、笑ッて自分を眺め、

『既う全然熱は無いのですよ。何も仕事はなし、所在が無いぢやありませんか。今話しませうや。』

『然ですか、夫ぢや悦で。』

と聞いたのが以下の話で、一字一句殆ど本人の言葉を其儘である。

然う、然う、と有馬は椅子に凭れ掛りながら續けるので)恰度如恁日の暮れ方でしたよ。其日はR―といふ友人と田舍へ往て、巴里に歸つたのは黄昏、何の氣なしに劇場へ往つたのです。中幕の幕間に一寸戸外へ出やうと廊下を通る拍子に友人は痩方な美人に行逢ひさま叮々しくお辭儀を爲た。

『君かお辭儀をしたのは誰？』と僕が訊ると、

『後藤露子。』とひふ返答。

『大層變つたぢやないか、僕は知らなかつた位だもの。』

言つた時の僕の胸は既一杯なんで。

『露子は病氣だッたんだ。可哀さうに、長くは保つまいよ。』

と聞いた時の心地、宛で昨日の事の樣に、言が今も耳に殘つてゐる。

茲で言つて置かなくちやならんですが、此二年といふもの、此婦人を見ると、一種妙な感想がするので、顔は眞蒼になる。動悸は劇しく搏つ。が何故とも自分には解らない。友人で筮トの神術を研究して居る男がある其奴は常之れを『宿世の因緣』といッてゐる。僕にして見ると、自分は左に右露子に戀着する樣に前世から持つて生れて居るので、末始終は然なるに違ひな

いと信じてゐました。

僕が露子の事を深く思つて居たのも事實、恐ぶれど色に出にけりで、友人等が勘付たのも確實、そして其相手が知れてからは友人等も頗る興がつたのも確實なので。

臍の緒切つて始めて露子に逢ッたのは株式取引所の辻なんです。幌無しの馬車が、ある店の前へ着て、白衣の婦人が降りて店へ這入る時、四方からわつといふ感歎の聲が起つた。

自分は其姿を見ると、這入つてから出て來るまで、其儘其處へ釘附になつた樣に、身動きもならない——尤も買物を爲て居る容子は硝子越に見えて居る。自分も這入つて行つて別に差支はなからうが、自分は其婦人を知らないのだから、設し這入つて行て、何故來たのかと怪まれたり、其廉事で機嫌を損じては大變と敢て這入りも爲なかッた。併し再と此女を見る

事が能やうとも思はなんだ。

其着附の美しい事、裾飾の澤山附いたモスリンの着物に隅を金絲で繡刺した印度織のショオル、以太利の麦帽子に淺白した腕環と、恰も當時流行かけの太い金鎖といふ粉裝。見惚れて居る中、婦人は再馬車に乘て往つて了ッた。店員が美人の影を見送りながら窰端に立て居たので、自分は其前へ行て婦人の名を聞くと、

『後藤露子樣です。』と答へて呉れたが、宿所は能う尋ねも爲ず悄々と引返した。

暫く間の幻影、其幻影をかがら、今日までに見た幻の樣に直ぐ忘る事が能ない。如何かして今一遍拜みたいものと、盗取眼で索めて居た。で五日後、オペラコミック座に大一座があつたので、自分も行くと、一番初めに眼に這入つたのは、桟敷の中の後

藤露子。

僕と一緒に往た男は直ぐに露子を見附たものと見えて、自分に向ッて、

『君、あのまあ良い婦人を見給へ。他が後藤露子だ。』といつた。

露子は双眼鏡を自分等の方へ向けて、友人を見附けたらしく些と笑つて點頭て此方へ光來いの意を示したので、

『どれ、一寸行て挨拶して來てやらう。即刻に歸つて來るよ。』

『旨くやるね。』と自分はつい言はずに居られなかつた。

『何が。』

『那婦人に會ふなんテ。』

『君は他にお思召があるのかい。』

『否。』何といッて可か解らないので、唯顔を赧らめて、『が那の婦人の知己にはなりたいね。』

『一緒に行かう、僕が紹介する。』

『紹介しても可いか一遍、まあ、聞いた來たまへ。』

『何有、其麼に七面倒に爲なくつたつて可いのだ。サ、來給へ。』

之を聞くと自分は甚だ當惑した。自分は頗る他を想つては居るが、實は其丈に想ふ程の値打のない女なのか知らと、心窃かに殆ぶまれるので。

アルフォンス、カミルの書いたアム、ローシャンといふ書に、ある男が、そも顔を見た發端から、優れた容貌に惚れ込んでゐた其婦人に、或る夕暮出逢つた所から、後生大事に跡を跟いて、縦に其手に接吻さへさせて貰へれば、假令火坑海底にも飛び込まう、二つない命を的にしてもなど思ひながら、婦人が泥の途を行く時、揭げる裳の隙から、恰好の良い踝の隙見さるゝをさへ、失禮と目も呉れず、謹んで從ひつゝ、如何して手に入れ

やうかと、種々樣々の夢を見てゐる中、偶婦人は街の曲り角に立停ッて、『貴君御一緒に妾の宅へ光來ませんか。』と言つたので男は俄に頭を回らせ街を横切つて悄々自分の家へ歸つたといふ話がある。

自分は此譚を憶起した。露子の爲なら甚麼苦勞でも爲やうと思てゐたものだから、却て露子が餘り雜作なく諾と言ふ樣ぢや困るが、其麼事はあるまいか。思を遂げる爲なら、悅んで長の歲月辛抱もしやうし、種々な憂い目辛い目もして見たいのが自分の願望。夫を却て、オイソレと來はしないか知らと、寧そ其が氣になるので。

一體人間といふものは其麼者。肉體丈の娛樂なら誠に可惜な者だが是に想像といふものが出て來るので味が附て來る。肉體の慾といふのも强いものだが、精神の慾には有數に一目置いてゐる處が身上なんだ。

もし今晩此女の情夫になつて、明日は死ぬのだといふ事なら自分は悅んで諾けたに違ひない。が百圓出せば情夫になれるといふことなら、自分は御免を蒙ッたらう。子供が夢に立派な城を見て居て、覺めると夫が消えるので聲を揚げて啼く樣に自分も大聲に泣き立てたらうと思はれる。

が愈よ斷念るか、生命迄拋り出すか、定るのは知己になるの他はないのだから、知己にはなりたいで紹介されるにしても是非許諾を得なければならいと主張つて、廊下を漫歩きながら、口の中で瞬時に彼の婦人に會へるのだ。會へば奈何爲やうかい、決定るんだ。など、呟いては更に心の中で會ッたら何といはうかと對話を考へて見たりなんかして居る。嗚呼戀となると兒童だ。

程なく友人が歸つて來て、『往かう、會ふッて言つたよ。』といふので、

『那の女一人かい。』

『他の婦人が一人と。』

『男は在ないか。』

『居ない。』

『ぢやあ。』

友人は劇場の出口の方へ行くので

『此方ぢや遠ふぢやないか』と自分は注意けた。

『出て行て何か菓子を買ッて來なくちやならないんだ。買ッて來て呉れろッて頼まれたのだから。』

打伴れて小路の菓子屋へ行つたが自分は店に在る丈全部でも悦んで買ひたい位の意氣込で、何を買へば良からうかと、

其方此方眴して居る中友人はレーザン、グラーセを一封度と注文した。

『那の婦人其が好かね。』

『誰でも知つて居る、此より以外喰べは爲ないさ。』

店舗を出ると友人は又話を續けて、

『他は何物だか君知つてゐるかい。華族のお姫樣だと思ッてちやあ間違うよ。言うか、圍ひ者だ。正眞正銘札附の圍ひ者だ。だから遠慮する事は要らない。何でも行當りばッたり、どし言つて遣り給へ。』

『ウム、ウム。』

と點頭く位で、唯彼の跡に踉いて行た。

其間も肚の裏では直ぐに思ひが遂げられるわいなど私語いて居たのである。

桝へ這入ると恰度露子は何か笑つて居た所であッた。章の事沈んで居て呉れた方が幾何此方には都合が良ッたかも知れない。友人が自分を紹介すると、露子は輕く點頭いた計り、直ぐに『そして私の菓子は？』と尋ねた。

『ム、此です。』

露子は菓子を受取りながら自分の顔を見たので、自分は周章て丶低頭いて、我にもあらず染め來る双頰の紅。

露子は隣の婦人の肩へ凭れつ何か耳打を爲て、ホ丶丶と兩人笑ッたのは自分が因あのは解り切て居るので、尙更に狼狽いた。當時自分が想を通して居た娘は極情愛の厚い、量の小さい婦人だッたので、其差かしがッたり心配して手紙を寄すのが自分には甚く可笑しくッて笑た事も屢々だつたが、今自分は初て其娘の所感を同情る事が能て、五分間も經つ間に無上

に其が可愛くなつ丁ッた。

露子は菓子を喰べながら、既う自分の方は顧みも爲ないので、友人は折角紹介せた事だから、自分のてれてゐるのを見て取て、

『露子樣、有馬君が語を言はないからッて可笑しく思ッてくれちや困りますよ。貴嬢が餘り美しいものだから、驚いちまつて絶句したのです。』

『何有、貴君が孤獨で光來るのが面倒だもんだから、牛に牽かれて善光寺詣の御迷惑な役廻なんですよ。』

『否、其慮事なら態々紹介を爲て貰ひたいッて貴嬢の御許諾を求めはしませんよ。』と自分は周章て分疏すると、

『ホ丶丶、光來るのがお可厭だから、些でも延ばさうといふ魂膽でせうよ。』

自分は此種類の婦人は知らないのだが、併し斯樣いふ婦人が初めて人に會ふと得て頓智のあるらしい顏を爲て見たがる。殊に人を窘めたり揄揶ッたりして悦ぶ位の事は知ッて居る。之は毎日人に會ふと唯々諾々で頭が昂らないから此報復なので。

此鋭い舌先に刃向ッて巧く嗾を合せるには尋常ならん修業が要るのを、自分は此迄如何樣席に臨んだ經驗はなし、から野暮淡なので、殊に以前に自分が想像して、心の中に描いて居た露子といふものが餘り良過ぎたものだから、今聞く言辭が更に酷く想はれる。

何にしても、此婦人の言ふ事、爲る事、酷く自分の身に應へるので、自分は直ぐに起立ッて、

『設し貴女が然お考の樣でございますれば私は既うお暇とする他ありません。參ッたのは私の疏忽なんです。以後決して再お邪魔致しませんから情願御安心下さいます樣に。』

聲の調子は著しく違つて居た。――裏、まうとはしたが裏、まれなかつたので。

會釋をして桝を出た。自分が戸を閉るか閉てぬに復どッと笑ふ聲。誰か自分に衝笑ッていも呉れゝば一つ打擲つて遣らうものをと思つた位。

自分は桝へ還ると幕開の拆が入ッた。友人は隣の席へ復つて座に就くと。

『君は妙な事を行つたぢやないか、奴等發狂者と思ふせ。』

『僕が來て了ッてから露子は何と言ッて居た？』

『笑ッてね、從來に那麼變な方は見た事が無いッてッたよ。併し決して落膽する事は無いさ。眞摯に奴等の言ふ所を取上げ

さへしなければ可いのだ。奴等全然禮儀も作法も知らないんだからな。其麼事を爲て交際つて遣るのは猫に小判さ、却て變に思つて座箱へ乘てに行くよ。』

『畢竟我に於て何か有らんだ。』と態と無頓着な調子で、

『僕はもう二度と那の女に會はないのだから設令僕が奴に會ふ迄は好だッたとしても、夫は夫、今逢つて見てからは全然厭ッて了ッた』

『フム、他日君が奴の背後の桝に坐つて居るのを見る事が必然有らうし、君が奴に入れ上げて身上を傾けるといふ噂を聞く事も是非有るだらう。が左に右、君の說は誤ッては居ない。那の婦人は生立が良くないのだから。併し情婦に有つには他程の女は先づ無からうね。』

恰も良し、幕が開いたので、友人は默ッて了ッた。

演劇は何を演て居るのやら更に解らず、今日も尙記憶て居るのは、最には那麼に唐突に見棄てゝ來た席を今更未練らしく、時々自分が偷見た事と、其桝へは取替へ引替へ、新らしい顏が話しに來たのを見た事とである。

其間露子の事は思はない所か却て深く想ふ樣になつたので、奈何しても今の露子の無禮も矯め、自分の半間だッた事も恢復したいだとへ自分のあらゆる財產を傾け盡しても、那の婦人を手に入れて試たいとの考が擧くなつて來た。

演劇は未だはねないのに露子は同伴の婦人と桝を出た。で自分も起つと。』

『オヤ、君はもう去くのかい。』と怪むので、

『ウム。』

『何故。』といッた時、彼は露子の桝に人の在ないのを見付け

て、

『ア、往き給へ、々々、まあ旨く行り給へ、成り丈旨く。』

自分は出た。衣の音、話聲が階級に聞えるので、密と側へ偏ッて佇て居ると、例の二人の婦人は二人の若い男と一緒に出て行くのである。劇場の出口へ來ると從者が居たので、露子は、

『馭者にね、英吉利亭で待て居れつて。妾達は歩行いて行くから。』

數分時にして其の料理屋の前を通つて見ると、露子は二階の大廣間に坐つて花束の梯を一つ宛、引拷つて居るのを、二人の中の一人の男が、肩の處へ倚り掛つて耳打して居るが見へた。自分は向側の白銀樓第一階の室に陣取り、瞬時も目を離さず向ふの窓を見て居ると、眞夜中の一時になつて、露子は同伴三人と一緒に馬車へ乘つた。で直ぐに馬車で跡を蹤けると露

子の馬車は安丹街九番地で停まつて、露子が孤然と下りる。

と見ると、獨りで家へ這入つて了つた。今晩偶々孤獨だつたのかも知れんが何となく自分は嬉しく思はれたので。

其からといふもの自分は始終劇場とか極樂街で露子に會ふ。其都度露子には例の快活な容子が見える。所が自分には必ず燃え立つ樣な想が在るといふ組合。

然るに到頭彼に會はぬ事茲に二週間となつた。すると繻谷に會つたので露子の事を聞くと、

『可愛想に、病氣なんだよ。』

『奈何したの。』

『肺病なんだ。今の樣なことをして生活して居た日には病氣の悪りッ事はありやしない。既う床に就て了ッて凡そ死に掛つて居るんだ。』

人の心は不思議なもので、之を開くと何だか嬉しい樣な心、地がした。

毎日自分は露子の容體を尋ねに往つたが決して名刺は置かなかつた。其中大分快くなつたさうで田舍へ出掛けたといふ話。去る者は日々に疎しとやら、那までに深く心に刻まれた想も全く忘れたではないが漸く薄らいで、自分も旅行を爲て、新しく情婦も出來る、異つた事も爲る、仕事にも當る杯といふので、不知不識心がおまりそれに向かなくなつて來た。人が若い時分には狂氣の樣になつて置きながら齡を老つて考へると自分にも可笑い樣な事が隨分あるもので、此頃露子の事を憶起すと一寸其麼想がせられる。が是れも彼を忘れたといふものゝ、決して自分の未練氣が無かつたといふ證據にはならない。結局二年の間一度も見なかつたからこそ、忘れて居られたので、決して當にはならない忘れ樣なのだ。併し左に角劇場の廊下で逢つた時には彼と知らなかつた位に忘れた。勿論其時は瓦紗を掛けて居た。是が二年前なら顏を裏んで居やうが何う爲やうが、もう見なくつたつて丁と知れる。虫が知らせるので、姿も見ず聲も聞かないだつて知れたのだものを。

所が今逢つた婦人が露子と知れると最期、動悸は烈しく搏つので、二年の歲月掛つて漸く忘れたと思つて居たのが、衣の端がさらり觸れた丈で、いやはやもう滅茶苦茶。

（八）

ですが（と暫時息を繼で有馬は又語り續けるので）自分は依樣彼には戀着して居るが、今は前と違つて大分修業も積んでゐるしするので、會つて話を爲たいと思たが、其中に一つ自分が昔の樣に左樣易々取ッ締められはしないのを見せたいと

いふの心地もあつたのである。

恋となると人も百方な事を行出すもの。思つた事を遂るには其は〳〵理屈も附けられるものと、我ながらも驚かれる。

自分は到底廊下に凝乎して居る事が能ず直ぐに楼敷へ復つて何の桝に露子が居るかと急いで眴すと、露子は平場に獨で挙然と坐つて居る。前にも言つたが、其變つた事、變た事、例の人を嘲む様な笑は痕跡もなくなつてゐる。病氣に苦しまされ今日も尚苦みつゝ、時は春の四月といふに着物は全で冬物で全然毛皮に裹まつて居やうといふ始末。

凝と眼を定めて視詰て居ると到頭先方でも氣が注いて暫くの間眺めて居たが軈て双眼鏡を取上げてよく見定めたが確乎に誰とは知れぬながら、自分の顔に見覺えがあつたと見えて、双眼鏡を置くと此方から叩頭をするだらうといふ様に

例の女性の艶めかしい挨拶、その微笑を嫣然に洩らした所が自分は故意と應じなかつた。女の方で覺えて居るのに此方では忘れたといふ顔をして、一つ茲で先づ勝を占めて置く了見。露子は誤ッたと思ッたか彼方を向いて了ッた。丁度幕開きの蝶析。

劇場で露子を見る事殆ど何度といふ數は知れぬが、何時とても彼が毫末でも演劇に氣を注けてゐるのを見た事はない。其實自分はといふと、同じく演劇は些とも面白くなく、唯露子の方ばかり見て居た。尤も精々先方には悟られぬ様。

暫時にして露子が向側の方の人と目交をして居るのを見たので、其方角を見ると、是は極自分の悪意な婦人である。舊依様妾で、其後俳優に成り掛けて失敗ッた揚句、交際社會に知己の多いを幸ひに小間物商を開業した代物。

此婦人さへ利用すれば確實に露子に遭へると見て取つたから、自分の方を向くのを待構へて居て、手で以て挨拶を爲ると案の定目顔で見せて自己の桝へ來いと知らせくれた。

春田てる、といふのが其小間物屋樣の姓名で齢は四十歳、體軀は肥えた方で、此方の知りたいと思ッてる事は何？　殊に自分の樣に困難の無い事を知らうとしてゐるのを悟らせるには別段策も何も要らない質の女なんで。

おてる夫人が露子と目顔で嫣然笑を交せたから、茲なりと早速問掛けた。

『誰を見て居るんです。』

『後藤露子。』

『貴女那の女を知ッてるの。』

『私のお得意先ですもの私の家の隣ですわ。』

『ぢや貴女の家は安丹街なの？。』

『七番地。恰度露子樣の化粧室の窓と家の窓と對向て居るんですよ。』

『那の女なか〳〵可愛い婦人だつて大層評判ぢやないか。』

『貴君御存知ないんですか。』

『知らない。たが奈何か心易くなりたいと思つてゐるので。』

『此處へ光來いッていひませうか。』

『否夫より僕紹介して貰ひたいんだ。』

『那の婦人の家で？。』

『ア、。』

『夫は一寸困難うございますね。』

『何故。』

『露子樣には後見人があつて却々甚助なんですから。』

『後見とは面白い。』

『だッて後見人ですわ。』と繰返して、『何しろ齢を取つて在るんですもの、其樣異な關係なんて在りはしませんわ。』

おてる夫人は茲に露子が田舍で侯爵と懇意になつた仔細を語り聞かせた。

『夫れで即ち露子樣が孤獨で來て居るといふ所以かね。』

『然ですよ。』

『ぢや誰が家へ伴れて歸るのだ？』

『侯爵樣が。』

『侯爵樣が來るの？』

『もう直ぐ來ますよ。』

『すると貴女は誰が送て行くの？』

『誰も。』

『僕送らうか。』

『貴君はお友達と御一緒でせう。ぢやなくつて？』

『二人で行かう。』

『お友達は奈何方？』

『極面白い男だ。悅んで貴女の親近になるよ。』

『左樣ですか、ぢや然しませう。私は次の幕は知つてますから、此が濟んだら歸りませう。』

『友人に然言つて來よう。』

と立たうとするとおてる夫人が袖を控て

『ア、露子樣の所へ侯爵樣が來ますよ。ホラ。』

顧眄つて見ると、七十前後の老人が背後に立て菓子を渡すのを露子は笑みを洩して直ぐに之に手を着けたが又直ぐに其袋を春田夫人の方へ差出して召上りませんかといふ樣子。夫

人は澤山と手を揮て見せたので、露子は袋を引込て、侯爵と何か談話を初める。

斯樣事細かにお話をするのは子供の樣にお思召すかは知りませんが、何でも露子の身に關つた事は、凡て昨日の事の樣に思つて、現然と思ひ出されるのですからつい。

で自分は五姓田の桝へ歸つて、春田夫人との約束を話すと彼早速承知したので、桝を出て夫人の許へ往かうとすると、出合頭に侯爵と露子が歸る處なので、片側へ避けたが、眞に自分が今侯爵の代位になれる事なら、十年は生命を縮めても惜くはないとつくづく……

戸外へ出ると侯爵は露子を馬車に乘せ、自身に鞭を揮ツて一目散に駈け去た。

自分等は春田夫人の桝へ復つて、幕が閉ると早々馬車を驅て安丹街七番地へと歸ると戸口の所で夫人は自分等を引止め左に右上ッて陳列所を見てくれろとの事。自分等は未だ見た事は無し、夫人も餘程自慢らしいので、素より下地は大進み、何うやら大分運が向いて來たらしく、階子段の一つもなかなか上るに眼合が有ッて、座に就くと直ぐに話柄を夫に向けた。

『隣家には老公爵が住居してゐるの。』

『否露子樣は多分孤獨でせうよ。』

『夫ぢや淋しくて堪るまい。』

『否夜になると妾が先方へ行くか、露子樣が家へ來るかして居るんで、二時より早く彼の女は寢た事無し。夫より早くは寢られないんですよ。』

『何故』

『胸の鹽梅が不快くッて平素騷ですよ。』

『情夫はないの。』

『妾が歸る時分には既う誰も居ませんよ――尤も妾が歸てから誰も來ないとは言へませんがね――N伯爵とかいふ方が見えますがね、御自分の意ぢや、毎晩十一時頃に遊びに來て、露子樣には幾何でも寶珠抔お贈與になつて、夫れで大分思ひ通りになつて來たやうに思つて在らッしやるんだが、露子樣は胸が惡るくなるほどに可厭がつて居るの。時々妾が那の方は丁度良いぢやないかッて勸めてやるんだけども無効。他の事なら何でも妾の言ふ事を聽くんだが、其事を言ひ出すと顏を反らし、つちやつて、伯爵はあんまり鈍間だつていふんですよ。そりや鈍間は鈍間だが、侯爵は既う何時知れない高齡でせうだから萬一の場合には丁と此方が柱になりますわ。夫れに那の老爺樣却々卑吝で、家の方では皆で露子樣に關係して

ゐるのを叱言を言んださうですから、死ぬ時分には何れ何にも遺して呉れはしますまい。夫や此やで始終露子樣に言つて上るんですけれど、侯爵が死んでから考へたつて澤山よッさう云て了ふんですもの。那樣事をして生活てたつて、面白くも何ともありやしない。妾ならまあ那樣老爺樣は眞平ねえ。眞箇に面白くおいつたら、露子樣を娘々つてね、宛で子供待遇だから、もう邪魔になつて仕樣がないの。今でも吃度人の一人やそこいら其處の通の處に附けて置て、誰が露子樣の家から出る、這入る人は誰だッて、見張がさしてあるに違ひないんですよ。』

『フゥム、夫は可哀想だな。』

と五姓田はピアノの前へ坐ッて、ワァルッを彈きながら、

『其樣事は些とも知らなかッた。が此頃大層元氣の惡い事は

俺も氣が注て居たんだ。』

『ア、一寸靜かに。』と夫人が言つたので五姓田が手を休める

と、

『露子樣が呼んでる樣だ。』

自分等が耳を澄てると果然聲がしてゐる。

『おてる樣、おてる樣！』

『失禮ですが、既う歸て下さいな。』

と春田夫人は言ひ出したので、

『オヤ〳〵お客樣ッていふものは如態に待遇れるものか知ら。』と五姓田は笑ひながら、

『歸りたくなるまで歸りやしない。』

『なで歸らなくちやならないの。』と自分は稍氣色を損じて訊くと。

『妾は露子樣の處へ行くんですもの。』

『夫では茲で待つて居やう。』

『可けませんよ。』

『なら一緒に行かう。』

『夫は尙可けないのよ。』

『俺は露子を知つてゐるんだもの、遊びに行たつて關やしない。』と五姓田は却々負けて居ない。

『だッて有馬樣は知らないんだもの。』

『俺が紹介するよ。』

『其は能ませんよ。』

言つて居る間に再露子が呼び立てる聲が聞えるので、夫人は化粧室の窓の下へ駈けて行つた。自分等も跡に續いて先方から見えない樣に身を隱すと、

『まあ最前から十分間も呼で居るんだわ。』
と露子が先方の窓から稍、鷹平な調子。
『何御用？』
『直ぐに來て頂戴よ。』
『何故。』
『N伯爵が未だ歸らないんだもの、妾やもう死んで了ふわ。』
『今行けないんですよ。』
『何故』
『若い人が二人來て居て、歸らないんですもの。』
『他家へ行くんだからッて然言へば可いんだわ。』
『然言つたの。』
『ぢや抛棄て置て御光來よ。在なくなりや歸つ了ふからさ。』
『其樣事をすりや家中の物品を顚倒して往きますよ。』

『夫ぢや何樣爲てくれといふんだねえぢれッたい。』
『貴女に會ひたいッて言ふの。』
『何てえ人？』
『一人は貴女御存知でせう。五姓田樣。』
『アゝ那の方、知ッてるわ。でもう一人は。』
『有馬喜太郎樣ッて、貴女御存知ないでせう。』
『知らないけども可い事よ。伴れ立ッて、光來い。誰だッて關はない、伯爵より優だから。光來いよ、直ぐに。』
露子は窓を閉ぢた。春田夫人も同じく閉めて了つた。露子は些の間だが、自分の顏を記憶えて居ながら、自分の名は忘れて了つたと見える。如樣事ならば少々自分の不利益になるにしても、記憶えて置いて貰ひたかつたので。
『露子は悅んで俺達に會はうと言ふだらうと、丁と思つてた

んだ。』と五姓田がいふと夫人は帽子とショールを着ながら、

『御馳走様。自惚も大概になさいよ。伯爵が五月蠅いから會うといふんでさあね。だから伯爵の様に頻く爲ちゃ可けません よ跡で直にお尻が妾ん所へ來るんだから。』

自分は夫人の跡に跟て階子を下りたが身體は劇しく胴顫がして、ぬて、何だか、今晩露子の家へ行くのが此當來自分の生涯に大變な關係がありさうに思はれ、前にオペラコミック座で紹介された時より酷く逆上せてゐる。殊に露子の家の門口へ來ると頭腦が痺として既う夢中だつた。

奥にはピアノの音がする。春田夫人は鈴を曳て案内を乞ふとピアノがぴたり息んで、下女にしては上品過ぎる美しい女が戸を開けた。

自分等は應接間から露子の居室へ通入ッたが、昔も今の儘

のもので此方には若い男が爐の處に凭れて居ると、先方に露子はピアノに掛ッて端物を彈ぎて居る、といへば大層聴こえさうだが、男は振られて居るのに心が着いて居るし、婦人は頻さがつて居るので、四邊は見るからが可厭な心地。

春田夫人の聲を聞くと露子は立上つて、自分等の方へ近附き、さも嬉しさうな顏色に夫人を眺めて、

『光來い、良くね。』

(九)

『五姓田様今晩は、好く光來ッてね。劇場ぢや何故妾の許へ來て下さらなかつたの。』

『失禮だと思ッて。』

『お知合の方あら。』と暫時何を切ッて默止つて居る。初め挨拶した容子は、奈何にも馴々しかつたが、唯知合といふ丈で、別

に何でもないのだと確かに傍の者に思はせやうといふ風で改めて、『知合の方なら來て下されば妾は何時でも悦んでるのよ。』

『ぢやお知合の證を以て、有馬番太郎君を紹介さして頂かうか。』

『夫はもうおてる樣から話が有たんだわ。』

自分は輕く會釋をして、

『いや紹介丈ならば、前に一度お目に懸つた事があるのでございます。』

と今日は命限り何樣やら彼樣やら聞える丈の聲を漸と絞出す事が出來た。

露子は美しい眉をひそめて、憶起さうとして居たが、何樣も憶ひ出されぬ樣子。

『初めてお目に懸つた時は、誠に失禮を致しまして、御迷惑だつたでせうから、お忘れ下すつて居る方が誠に結構なんで、恰度二年前、オペラコミック座で、飯山と一緒に。』

『ア、左樣々々。』と露子は嬉然として、貴君が失禮なもんですか、私が酷かつたんだわ。今でも然ですけども、些わ優よ。貴君でも那は堪忍ね。』

と柔かな白い手を差伸べたので、自分は其に接吻した。露子は又語を續で、

『妾はね、始めて會ふ人を困らせやうとする惡い癖があるんですよ。馬鹿ね。お醫師樣は神經の惡いのと、健康が惡いからだつてますがね。ま、然としといて頂戴。』

『だつて極壯健さうに見えますよ。』

『あらまあ大層惡いんですよ。』

『光も夫は知つてますがね。』

『誰にお聞きなすッて？』

『誰でも知つてましたよ。始終私は御容體を伺ひに來ましてね。大分快い方だと聞たので大變悦んで居たんです。』

『私が健康の惡かつた時毎日尋ねに來て、名を言はないで歸つた方は貴君？』

『エ、私ですよ。』

『まあ貴君は眞實に難有い、眞實に勿體ない！』

古いが英雄豪傑も惱殺すてふ一轉の秋波を自分の方へ與れて置て、さてN伯爵の方に向ッた。

『伯爵、お前樣だつたら此樣事爲やしないわ。』

『だッて他は心易くあつてから僅二月しかならんのぢやないか。』と伯はいふので、

『此方は僅五分間ぢやないかね。お前樣は平常でも半間な事をいふよ。人ッ。』

婦人といふものは氣に向かない人に對ふと、手酷くやるもので、伯は面目もなく、顏赧らめて唇を嚙んでゐる。

他も自分の樣に深く露子に戀着してゐる樣子が見えるから、自分も眞に氣の毒に思つた。殊に知らぬ男が二人迄居る前で那樣に言はれた日には堪つたものぢやないと思つたから自分は話柄を反らす爲に、

『私此が來た時に貴女はピアノを彈てお在でしたね。どうか御ひお知己の意で御遠慮なくお彈下さいましな。』

輕く身を寢椅子の上に横たへ、手眞似で自分等にも寢椅子を勸めつゝ、

『否、私のピアノなんて五姓田樣がよく知つてるわ。伯と對座

の時なら良いんだけど、ども貴君方は然う酷い目に遭はしては
濟まないから止しませうよ。』
『依様俺は良いと見えるね。』と伯は微笑みながら反對に一本
突込んだ意露子は隙さず、
『北で窘めやうッたッて無効よ。お前様にはピアノッ限りさ。』
是だもの、伯は一言もいふ事は能ないのだ。伯は奈何にも哀
れさうな眼で凝と露子を眺めたが、露子は顧みもせず。
『時におてる様、妾が頼んで置た事爲て呉れて？』
『エ、。』
『然、後刻で聞きませうよ。夫迄に歸つちや可厭よ。』
『是はお邪魔します。私は既う是れで二度も紹介して貰つて
初めのを取消したのですから、五姓田と私は歸りませう。』と
自分は言出した。

『アラ、然ぢやありませんよ。妾は貴君へ言つたんぢやありま
せんわ。貴君は居て下さいよ。よう。』
伯は衣兜から美しい時計を出して時間を見て、『既う倶樂
部へ行かなくちやならん。』
といつたが、露子は何にも言はない。伯は爐の前を退いて露子
の處へ行た。
『ぢや左様なら。』といふと露子は立て、
『左様なら、貴君もうお歸り？』
『ア、お邪魔だらうから。』
『お邪魔は平常ですよ。別に今日に限らないんだわ。今度何時、
光來るの？』
『貴女の好い時。』
『ぢや左様なら。』

嫌といッても少しは愛想といふ事もありさうなものを。世辭もなければ膠もなし、側で見る者にさへ餘りに酷いが伯爵は人品ではあり、萬事溫和な人だもんだから、露子が可厭々々差伸べた手に輕く接吻し、自分共の方へ會釋をして出て行た。

戸口を出やうとする時回顧ッておる夫人を見た。夫人は肩を聳かせて、『何か御用ですか。妾の能る丈の事は爲て進たぢやありませんか。』と遣り込めるやうな眼付。

『お夏、伯がお歸りだよ。』

と露子が呼ぶと、暫時して表の戸が開て又閉る音がした。露子は歸つて來て、

『ヤレ〳〵到頭歸ッちやッた。既う眞箇に那の人の顏を見ると胸がむか〳〵する。』

『露子樣。』とおてる夫人は猫撫聲で、『餘り酷いぢやないか

ねえ。那の人は溫和くつて、極親切ぢやないか。此まあ過日持て來て下すつた時計を御覽。奈何樣に廉く算つたつて二千圓は慥かに出てるよ。』

春田夫人は爐の上の棚に載つてゐる時計を反覆ては左視右顧さも羨ましさう。

『だつてね、那の人の贈與す物と、那の人の言ふ事とを天秤に掛けて試ると、何を持て來たつて廉い物さ。』

『可哀想に餘程お前樣に御座ッてるんだよ。』

『人に惚られたからつて一々相手になつてた日にや、お仮喰べる間もありやしない。』

とピアノに指を著けたが、また此方を向いて

『貴君何を召食るの？　妾一杯呑みたくなッた。』

『何か喰るんなら、妾チキンよ。』とおてる夫人喰氣には負を

取らない方、すると五姓田が、

『良からう。一寸何家か喰に往かう。』

『否家で喰べるのよ。』

と露子は呼鈴を鳴らすと、お夏が這入って来た。

『何か喰る物を然言つて遣ておくれ。』

『何を申しませう。』

『何でも良いもの、何なと早く、疾くよ。』お夏は出て行った。

『サア御飯々々。』と小兒の樣に躍りながら、『眞箇に伯のお、たんちんッたら可厭だ事！』

見れば見る程恍惚するので、全く脱て出る程美しい嬋々とした其姿子は唯思に沈んで居た。

到底口では肚の裏を細かに言ふ事は能ないが、露子の生活方が何樣であらうと、自分は決して關はない。といふ裏には其

美しい姿に上もなく想ひ入ってゐるので、今眼のあたり、金錢の在り餘つた當世才子で、彼の爲ならばほどの財をも悦んで擲ちうとするを、尻眼も呉れず跳ね付けた思想の淨さを見せられて、從來甚麽事をしたにもせよ、奈何な批の打ち點がありつたにせよ、既う之で澤山、僭ひどころか餘って返ると思ふのであつた。

露子には飾らない、直な所があつて、濁に染みて居るといッても僅の表皮位なものだ。其確乎した歩行振、腰の柳のしなやかさ、薄く藍色を隈取つた眼の球の清やかさ、何れも四邊に得も言ぬ薫を溢らせるので、ひはゝ香良き香水壜の奈何に嚴しく封して置ても、自然と四周へ香を放つ樣な鹽梅。まこと彼の稟性か、熱の所爲なのか、時々彼の眼から美しい希望の光が輝いて、心から可愛と思ふ男へ向けて氣高い光を投げ掛けるの

である。凡そ今日迄彼を慕つた男は多からうが、此氣高さに壓されて了ッて自からかう思はれてゐると思ッたのもあるまじく、況して露子に惚れられた男は尚更解らぬのである。

結句露子は無垢の天女、夫が何でもない機で賤しい女になつてゐるので、其賤しい女ではあるが、何でもない機で又餘の極可愛い、極無邪氣な極清淨な乙女になれる婦人といふ事は、爭はれない。何よりの證據には、露子が意氣地と張とを有つてゐる事で、よしや少しは濁りに染て居るにせよ、尚だ羞恥を知つてゐる丈は確である。

自分は一言も口を利かなかつた。實は精神も靈魂も藻脱の殼になつて、皆兩眼へ集まつて居る樣な心持。露子は唐突に、

『私が病氣だッた時毎日尋ねて下すつたのは卿？』

『然です。』

『まあ眞箇に感心だ事。何うすれや此御恩報が出來るんでせう。』

『時々伺ひますから、會つてさへ下さりや澤山です。』

『請願、何日なと。五時から六時までと、十一時から十二時までなら何日でも。ア五姓田樣、ヴァルスの曲をお彈きなさいな。』

『何故。』

『先妾が聞きたいからさ。夫に妾如何しても彈けないんだわ。』

『何處が困難いの。』

『三段の手の込んだ所。』

五姓田は起立つてピアノに向ひ、前に擴げてある譜本のウエーベルを彈き初めた。

露子は隻手をピアノの上に載せて、指を動かしつゝ低聲で唱ッて居たが、例の『込んだ所』へ來ると調子良く唱ひ出して

五姓田の指の運ぶが僅に聯いて見るのであつた。

『ドレミドレファミレ。其處よ、其が能ないの尚一遍』

五姓田は又彈復すと露子は、

『ドレ妾行つて試やう。』

席に掛ッて行り初めたが、奈何しても例の所へ來ると行止まつて了ふ。

『那が能ないッて不思議ぢやないかねえ。』と小兒其儘の調子で、『朝二時間も掛ッて那計り稽古する時もあるのよ。夫れに……夫れにあの伯のひよつとこが譜おしでも巧く彈くと思ふと憎しくなッて來て。だから妾那人を見ると癪に障るんだらうと思ふの。』

又始めたが同樣なので。

『可厭なッエーベル！譜本も譜本だ。ピアノ迄が生意氣に！』

いふかと思ふと譜本を取つて向ふの方へ投げ付けて。『其癖他の曲なら、込んだ曲でも入も續けて彈けるのが不思議ぢやないか。』

彼は腕を又ぬいて。自分等の方を見ながら足摺するので、頰には血潮漲ぎり、おせッたのでせき上るのか唇は微かに開いて居る。

おてる夫人は鏡の前に帽子を脱づて、髪を撫て付けて居たが、餘り見兼ねて呼びかけた。

『一寸、露子樣、彈きや彈くほどこぢれッちまうんだから却て身體の毒よ。夫より此方で御馳走でも食べやうぢやありませんか。妾はもうお腹が空いて生命が殆ひわ。』

露子は呼鈴を鳴らして又ピアノに向ひ、今度は俗曲を試みたが、此は手に入ッたものだ。恰度五姓田も此曲を知つて居た

ものだから、一寸合奏して聞かせる。

『其麼下品な曲はお止なさいましな。』と自分は頼むやうに言ふと、露子は嫣然笑て、自分の方へ手を差伸べながら、

『然ですね。貴君は眞箇におたしなみの良い事。』

『否私は駄ひませんが、貴女の沽券に關はりますから。』

露子は自分に向つて些と身振を爲た。お蔭様で久し振に喧みの良い婦人になりましたといふ樣子。

恰度此時お夏が這入いて來た。

『御馳走は出來たかい。』

『ハイ、唯今。』

『時に有馬樣は未だ方々拜見なさらんのでせう。光來い。見せて上げませうから。』

とおてる夫人の言ふが儘に行くと、第一が應接室、これは御

承知の通唯もう目も眩む計。露子は一寸跟いて來たが、程なく五姓田を呼んで、食事の準備が出來て居るかを見にとて一緒に食堂へ這入つて行つた。

おてる夫人は壁の上に小さなサックス製の人物の有るのを見て、

『オヤ、這麼可愛い人形樣の在るのは些とも知らなかつたわ。』

『孰。』

『其鳥籠を持つて居る小さなのさ。』

『欲しけりや進げませうよ。』

『否、貴女要るんでせう。』

『何有、家の婢に與らうと思つてたの。妾其は厭なんだもの。貴女良けりや進るわ。』

夫人は露子の切れ離れの好い事は何とも思はぬらしく、唯

人形を眺めて、之を傍に取除けた。

おてる夫人は次に化粧室へ案内した。茲に對向って二面の額が懸ってゐる。

『此が露子様に惚れてゐたG伯爵ってね、此人の爲に露子様が那様浮かれ者になっちゃったんですよ。貴公此方知って〻？』

『知らないで此方の人は？』

『那はL子爵到頭遁ッちまッたの。』

『借金で居られなくなったんでさあね。これも露子様に惚れてた人よ。』

『露子様の方でも惚れてたんだらう、屹度。』

『那の婦人は、奇體な質だから、些とも解らないわ。子爵が去ッちまった晩に露子様は平氣の平左で劇場へ往ってるのよ。然

かと思ふと子爵に訣別れる時には泣きの涙だッたんですが。』

言ってる時恰度お夏は御馳走が出來たッて報せに來た。自分等が食堂へ這入ると、五姓田は壁に掛れて居る露子の手を把て低聲に何か話して居る所であつたが、露子は自分等の這入つたにも頓着なく大きな聲で、『お前様は餘程頓馬だよ。妾はお前様が可厭だッてえ事は、よく知れてるぢやないか。妾なんぞを二年も經つ今日になッてッから口説なんて野暮の骨頂だわね。妾達はね、應なら應で手ッ取早く、勿體なんぞ附けッこなしだし、否といったら金輪際、千年萬年經ッたとてッさあさあ何誰も召食れ。』

と身を脱いで卓子に掛り、右に五姓田、左に自分を坐らせさせてお夏を呼ぶのてゐる。

『お前お膳へ据らない先に、臺所へ行て、誰が來ても入れちゃ

可けないと然言つてお出で。』

と吩咐けたのは既う是れ眞夜中の一時である。

笑ッて、呑んで、各自に快く喰べる。幾程もなく、興が愈よ闌になつて來ると、言ふ口の潰れにある樣な言葉が、續々起つて、おもて、おてる、露子、誰れも大呼采、五姪田は勿論悅んで居る――尤も極く良い男ではあるが、若い時分の習慣で道楽事は別に異みも爲ない。

幾時の間自分は努めて我を忘れ、他が何を爲やうと頓着せず、これも御馳走の皿數と思つて受けて居やうとしたのであるが少しづゝ自分は後退を爲てゐるので、自分の酒杯は酒の注いでゐる儘、目のあたり妙齡の婦人が、伸仕人足の樣に酒は鯨飲る、大口は利く、遠慮會釋なく笑ひさゞめく狀を見ては殆ど悲しい心地がした。が然し道楽事を爲て居るのも他の者は

惡るい人に交際ひ惡い風に染みたからであらうが、露子に限つては然でなく、病氣をまぎらす爲辯々するのを忘れるが爲に、詮方なく爲て居る事のやうに思はれた。

三盞酒一杯を呑む毎に露子の頰は紅の樣な色が輝くので、酒の初には殆ど知れなんだ咳が段々劇しくなつて來て、終には咳く度毎に背後へ倚り掛つて、頭を靠せながら、手で胸を抑へなければならぬ迄になつた。毎日如慨懶弱い軀體に、如慨事をして居ては堪つたものぢやない、奈何なるだらうと自分は夫が氣になつてならなかつた。

すると般鑑遠からず現在心配して居た事が、程もなく起つて來たので、酒宴も終末の頃露子は今迄になく劇しく咳き上げて、傍から見て居ても、胸が眞二つに裂けはしないかと思ふ位、顏は眞赤になつて、疼痛に眼を閉ぢ、ナプキンを取つて、唇に

出てたが、忽ち染むる一滴の血潮、彼は突と起て化粧室へ駆け込んだ。

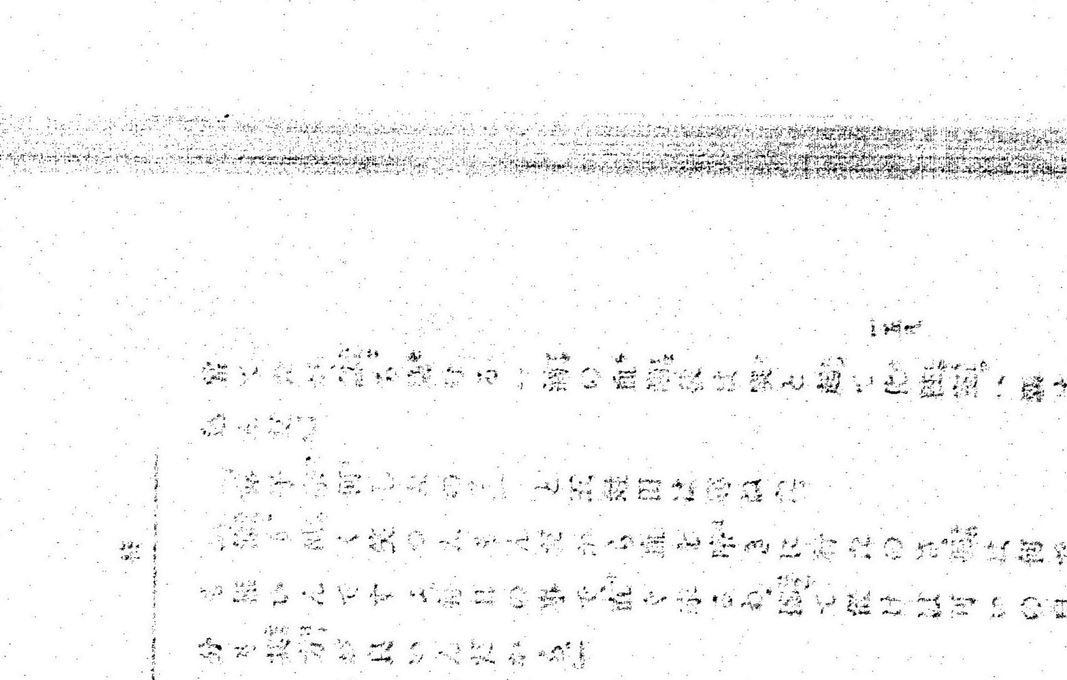
『露子奈何したの？』と五姓田は尋ねた。

『除り酷く笑つたもんだから血を咯きに行たのさ。那は何でも無いんですよ、毎日の事で直ぐ来るわ。捨て置けば可いの自分も北方が良いんだから。』

自分は都として居る事が出来ず、直ぐに駆け出さうとするのをおてる夫人と、お夏とが慌いて呼び復したが、耳にもかけず飛鳥の如く露子の跡を追うて行た。

（十）

露子の駆け込んだ室には蝋燭が唯一本点してある限、大きな寝椅子に倒れ掛つて、着物の前を披けたまゝ、後手に胸を押へ後手は傍へ垂下して、卓の上の水瓶の半分計水を湛えて



紅の血に模様を作して居るのに向ひ、面色眞蒼に、口は半開いて呼吸を繼がうとしてゐるので、時々長い大息の爲に胸が張るのが見えるが其所爲で少しは樂になるらしく、霎時は極苦もなさゝうにしてゐるので。

自分は彼の側へ行たが、彼些の身動きも爲ない。近々と座を占めて寢椅子の上に垂下して居る手を把ると、露子は些と笑つて、

『アヽ、卿でしたね。』といひながら又

『卿もお不快いのですか。』といつた處を見ると、自分も餘程顏色惡かつたに相違ない。

『否僕は奈何もないですが、貴女は尙不良いですか。』

『眞の些よ。』いひつゝ咳をしたので溢れ出る涙を手巾に拭ひ、

『今ぢや馴れッこになつちまつて。』

『貴女は其麼ことを爲れば生命を縮ますよ。嘘、私が貴女の友人でゝもわつたら、否親類でゝもわつたら、道麼身體の毒になる事は堅く御止め申すんだけれど。』

自分の聲は頓へて居る。露子はむしろ險のある調子で、

『卿其麼事で、心配して下さるがものはありませんよ。皆他の人は放擲かして置くぢやありませんか。奈何も爲樣が無いッて事は解り切ッてるんですもの。』

彼は起立つて、蠟燭を臺の上に載せ、鏡に打向つた。

『まあ、蒼い顔！』と着物の前を合せ、亂れ髮を些と手で撫でゝ

『さ、行て喰べませう。よ、行きませう。』

自分は凝と坐つたまゝ動かない。

彼は自分が酷く胸を痛めて居るのを悟つたらしく自分の

枕へ歩み寄つて、手を差伸べつゝ、

『サ、光來い、行きませう。』

自分は彼の手を把つて、之を唇へ持つて來た途端涙二滴我にもわらず其上に零れた。

『オヤ、兒童くさい。』と再び自分の傍に座を占めて、『卿泣いてるの。奈何したッてんですよ。』

『貴女には馬鹿の樣に見えるでせう。が私は今貴女の御容子を見て心から心配で堪らんのです。』

『御道理。だが奈何すれば可いんです。妾は眠られないんですよ。些たあ妾だつて娯樂もなくッちや行り切れませんわ。夫にも妾の樣な者が生きて居やうが居まいが、世間では痛くも痒くもないぢやありませんか。醫師樣の話では、此吐く血は、喉から出るんですつて。然でも然でなくッも、妾はまあ然だと思つと

くんです。もう其より上は妾には能ないんですわ。』

『露子様、まあ、聞いて下さい。』自分はもう抑へるに抑へ切れず、なつて、『此以來私は貴女と甚麼關係になるんだか、なれるんだか、知りませんが、今の處、世界中に貴女位、私の氣に惡る人はない。親兄弟の事も貴女位には思はれん。もう初めて貴女を見てから今日迄、此通りなんです。がまあ夫は兎に角、後生ですから身體を愛うて下さい。今の樣な生活方を爲ない樣に。請願是非。』『だつて身體を愛うて居た日にゃ死んで了ふわ。如德して狂氣の樣な事爲て居るからこそ保てるのよ。夫れはね、親類があり、友人のある婦人なら、身體を愛ふのは結構よ。だが妾邊になると、男の玩弄物になつて、樂ませる間は良が、其が能なくなると男は唾も吐掛て呉れやしない。夜も晝も、淋しい悲しい、陰氣な事ばッかり。現に妾に經驗があるわ。二月思ッた中で初三

週間丈。其以後になると、猫の子一疋、見舞に來てくれないんだもの。』

『否、私はいはば見ず知らずの他人の樣なものですが貴女さへ許して下されば、私は兄弟同樣に貴女のお世話を爲ます。決して左右を離れず、介抱して立派に癒して見せる。夫れで全然癒つて了ッてからならもしなさりたくば、今の樣な生計方を再なされば可いでせう。併し貴女は屹度眞面目な生計方が嗜好におなりに違ひない。其方が安氣で、貴女の美貌も何時までも變らないんですから。』

『今晩はお酒で氣が滅入てるから卿然思ふんですよ。醒めッ了や、決して其麼辛抱能やしないから。』

『だッて露子様。』と自分の情を酒の上の空事と想はれた心外さに思はず言辭に力が入ッて、

『決して恩に掛けるぢやありませんが、貴女が二ヶ月お患ひの間、私は毎日見舞に來ましたよ。』

『然々、何故上らなかつたの？』

『露子樣、貴女が從來屹度何度もお聞きになつた事、夫も餘り度々だから既う眞實には厭さらない位、度々お聞きの事、だがそれは確かに眞實で再と再び言ひませんから夫を聞いて下さいな。』

『夫とは、』と兩親が顏見合せ、微笑みあがら自分を見る。

『夫は如何なんで、抑も私が貴女を見てから以來何故とも解りませんが、私の意の中には常に貴女といふものが有る樣になつて、拂ひ退けても直ぐ復つて來る。で二年逢はないで居て今日お目に懸ると從來に知らなかつた程深く貴女の事が身

に泌て、今貴女の家へ參る事が出來て、貴女を知り、風巽りの人だといふ事が知れて見ると、既う私は貴女が無くちや生きて居られなくなつたので、もし貴女が、私を思つて下さらなけりや私は氣が狂ひます。否唯私に貴女を思ふなと仰る丈でも氣が狂ひます。』

『だつて卿は野暮よ。D樣の云ひ草ぢやないが、夫なら卿は金持でなくちや可けないわ。何故ッて御覽なさい、妾は月に三四千圓費ふんでせう。其れ丈なくつちや生きて居られないの。卿妾の樣な者に關係つたら、瞬く間に財產も摺ッて了ふし、妾の樣な者と一緒になるとなりや、家からは勘當でさわ。ね。だから御互に心易くして友人になりませう。仲善の友人ね。其丈にして始終來て笑つたり喋つたりすると、併し眞に滿らん婦人だから、買被らん樣に。卿は親切だし誰か情婦がなくちや可けま

すまいけれども偖り若し氣も細いから、妾なんぞと生活す事は能ませんよ。ね、立派なお妻さんをお貰ひなさい。奈何です妾は友人の樣に隔意なく言ふでせう。』

『其處で何を爲て居るの？』と叫んだのはおてる夫人。彼は知らぬ間に這入ッて戸の口に立てゐる。髮は亂れ、衣は前が披かれてしだらなくなってゐる樣、慌かに五姓田が巫山戲たに違ひない。

『打明話をして居るの、直ぐに往から、擲てお置きよ。』と露子のいふに早速出て、

『アヽ、然夫は結構、結々しッぱり、お睦じう！』

と戸を鎖めた。――何となく殊に其言葉を强める樣に。二人になると露子は續けた。

『卿は妾と情交にならないといふ事は可うございますね。』

『僕は既う何處か往つて了ふ。』

『其れ程まで？　なら何故あの時有仰らなかつたの。』

自分はあまりいひ過ぎて言ひ直す事も出來ず。露は此まで釣り出されたのである。

『其時分にはお心易くなかつたですもの。』

『妾の樣な者に左樣生丁面でなくッちやならないの？』

『人は婦人に對しては、必ず生丁面でなければならない。私は左に右然思つて居るです。』

『だから妾の世話を爲やうといふの？』

『然。』

『終日妾の傍に居て？』

『然。』

『徹夜でも？』

『貴女か五月蠅と有仰る迄は何時迄でも。』
『其麼のを何といふのです。』
『敬慕ですな。』
『大層むづかしい事ね。奈何して其麼事になるの。』
『奈何も私は貴女がおいとしくて仕樣が無いのですもの。』
『結局惚れて居るんだわね。然なら然といつちまや良いんだわ。解が良くッて。』
『其は然言へます。が早晩言はなくちやならんにしても、今日は可けません。』
『其は一生言はん方が良いでせうよ。』
『何故。』
『言へば二ッの一つしか無いんですもの。』
『一つとは、』

『妾が否といふか、――然すりや卿は妾を恨むでせうし――夫とも諾といふか――然すりや可厭な婦を情婦に有つ。短氣で、病身で、陰氣で、歎くのよりも尚悲しい樣な美な所が有て、年百年中血を吐て、一年に何十萬といふ金を費ふ婦人。此でも侯爵の樣な金持の老翁には良いんだけれど、卿の樣な壯い人、には極惡いの、其證據には從前若い人と情交になつても、皆退いて了ッたわ。』

自分は應へず、唯聞いて居た。いはゞ殆ど懺悔のやうな快活さ。金の覆紗で蔽ふてあるを、幾分か隙見した可憫の境涯。彼が懲りて逃れやうとして居る生活酒のぐい呑睡眠不足あと、酩く胸に應へて一語も口を利けぬのである。露子は言を續で、

『往きませう。如恁小兒の樣な詰らん事を言つて居ても仕樣がない。さ、手を曳て上げますから、食堂へ行きませう。二人で居

ないと皆が何爲て居るんだと思つてる。』

『貴女何なら行ッしやい。私は暫時此に置て下さい。』

『何故。』

『貴女がはしやいで在ッしやるのを見ると私は心配で悲しくなるから。』

『夫は妾も氣の毒だわ。』

彼には快活と悒鬱と、交り、公明と、不德と、雜ッて、其上に病氣があるのだから、些とした事にも鋭く感じるし、其代りに又腹も立てるだから、抑の發端から浮調子の點を抑へ切つて掛らないと末來永劫想は遂げられないものと、自分は覺悟してゐた。

『一寸、卿今言てる事は眞摯なの？』

『眞摯です。』

『なぜもッと早く妾に言なかつて？』

『其麼事言ふ機が無かッたです。』

『オペラコミック座で逢つた翌日だッて良いわ。』

『若し逢つた處で冷遇されると思ッたのです。』

『何故。』

『どうも半間な事を爲たですもの。』

『其は然ぬ。だが既う其時惚れて居て？』

『勿論です。』

『夫で家へ歸つてよく氣樂に寢られましたね。其樣　れ樣なら何だか、其位の事は熟く解つてますよ。』

『其は貴女の誤。オペラコミックを出てから其晩私の爲た事は御存知ありますまい。』

『知らなくッてよ。』

『私は英吉利亭の門で貴女を待つて居ました。貴女とお友人三人が乗ッて在ッしやる馬車に跟て行て、到頭貴女一人家へお這入りになるのを見て大層悦んだのです。』

いふと露子は笑ひ出した。

『何を笑つて在らつしやるのです。』

『何でもない事よ。』

『何です、ねえ、請願仰有つて下さい。然でないと私は尙貴女が嫌ッて在らつしやるんだと思ひますから。』

『卿憤らない事？』

『私に憤る權利があるものですか。』

『妾が孤獨で這入つたのは當然よ。所以があるんだもの。』

『何ういふ。』

『此で男が丁と待つてたのさ。』

氷の刃に胸先深く突立られたにしても、此程酷い苦痛は覺えなかつたらう。自分は忽ち起立ッて、手を突と差出し、

『左樣なら。』

『卿が憤るッて事は知れてたんだわ。男は必自分の辛い事を聞きたがるんだよ。』

『イヤ申しておきますがね。』と自分は早や癇癪の收まつた風を粧はうとするが如く、極冷靜に、『私は憤つては居らんです。人が貴女を待て居るといふのは些とも不思議はない。恰度私が此家から朝の三時に歸つて行くのに些も不思議はないのと同樣です。』

『ぢや卿も待つてる人があるの？』

『否……併し歸らなけりやならんです。』

『では左樣なら。』